

目次	大谷大学存立の意義	1
	2022(令和4)年度「指定研究」等研究経過報告	2
	2022(令和4)年度「一般研究」(予備研究)研究成果報告	13
	2022(令和4)年度東京分室PD 研究員個人研究成果報告	14
	紙野抄ワークショップ開催・参加報告(2022.10.1~2023.3.31)	18
	公開シンポジウム報告(2022.10.1~2023.3.31)	20
	公開研究会・講演会報告(2022.10.1~2023.3.31)	22
	国内研究調査報告(2022.10.1~2023.3.31)	27
	海外研究調査報告(2022.10.1~2023.3.31)	31
	真宗総合研究所彙報 2022.10.1~2023.3.31	36
	「研究所報」「研究交流」に関するご案内	43

## 大谷大学存立の意義

大谷大学長 一楽 真

真宗総合研究所が大学付置の研究所として開設されたのは、今を遡ること42年前の1981(昭和56)年の6月であった。時の廣瀬嶺学長は、折に触れて「真宗総合」ということと、「付置」の研究所が出来たことを熱く語っておられた。当時、大学院生だった私は、その言葉に触れながらも、そのことが有する意味をあまり深くは考えていなかった。自分の反省を含めて改めて尋ねたい。

「真宗総合」とは、真宗について様々な面から総合的に研究するというのではない。もしそうである場合、真宗はすでにある宗派や教団の名称であり、扱う文献も真宗系という枠に限られることになってしまう。「真宗」は「まことのむね」あるいは「まことをむねとする」という意味である。言うなれば、人間にとっての本当の拠り所を示す言葉である。

1901(明治34)年に「浄土真宗の学場」として「真宗大学」は東京巢鴨に開校された。初代学長(当時の呼称は学監)は清沢満之先生であるが、先生は「完全なる立脚地」という言葉で「真宗」を押さえている。ものを考え、何事かをなすについても、立脚地は不可欠である。その立脚地を明らかにするのが「浄土真宗の学場」であると言ってよい。この意味において「真宗総合」とは、人間にとっての真宗ということをも基盤にすえた大谷大学の学びを表現した言葉である。真宗に立った総合、真宗に依る総合が「真宗総合」である。

これがもう一つの「付置」という言葉とつながっている。大学と別置の研究所であれば研究のみに携わることもあり得るが、付置の研究所は学生の教育に当たることと研究が不可分に結びついている。そのことを廣瀬先生は、繰り返し述べておられたことを思い出す。何のための研究であるのか、人間が生きることとどうつながっているのか、実際に学生がどのように育っているかが問われているのである。

東京の真宗大学は1911(明治44)年に京都に戻る

ことになった。大谷派の安居を中心とした高倉学寮と合併して「真宗大谷大学」とすることが大谷派の会議で決定された。真宗大学では教職員の総辞職という反対が起きた。真宗大学からすれば、まさに「廃滅」の危機であった。ただ、何としても清沢先生の願いを継承し、真宗大学の灯を消してはならないという思いが、真宗大谷大学に引き継がれていくことになった。その時の学長が南条文雄先生であり、その南条先生の手で大学の内実化に尽力したのが佐々木月樵先生である。

真宗大谷大学が洛北の現在地に出来上がったのは1913(大正2)年のことである。その後、改革を加えながら大学としての実を整えていき、1922(大正11)年には大学令による大学として国の認可を受ける。その際に「大谷大学」と名をつけたのである。当時、宗教の名を大学に冠することが認められなかったという事情はあるが、「真宗」が大学名から消えたのである。真宗大学から真宗大谷大学、そして大谷大学と名前は変わった。しかし、存立の願いは清沢満之先生以来、今も変わることなく脈々と続いている。

佐々木月樵先生が入学宣誓式における訓辞として「大谷大学樹立の精神」を述べられたのは、1925(大正14)年の5月1日のことである。それから数えてあと2年後の2025年は、ちょうど100周年を迎える。このたびの特定研究は「大谷大学樹立の精神」100年」と題し、佐々木先生が「樹立の精神」に込めた願いをあらためて確かめることを目的としている。それは同時に、大谷大学がこの100年どのような歩みを進めてきたのか、またこの先100年どのように歩んでいくのかを確かめることになる。

日本の大学が置かれている現状は様々な課題が山積している。最も声高に叫ばれるのは少子化による大学経営の厳しさである。しかし、それぞれの大学が何を建学の理念とし、何のために存在するのかが、第一に問われなければならない。大谷大学の存立意義は何か、「樹立の精神」100年に向けて再度確認していきたい。

# 2022（令和4）年度「指定研究」等研究経過報告

## 特定研究

eラーニングなど、インターネット環境を活用した新しい教育システムの開発・導入

研究代表者・教授 一楽 真  
(真宗学)

大谷大学は開学以来、仏教および真宗の学びを一般社会へと広く公開していくことを理念として教育活動を展開してきた。「Eラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開」研究班は、近年の情報化社会に相応する形で、本学の理念をより積極的に展開することを目的としている。そこで本研究班は、これまで学習機会を得ることができなかった遠近各地のより広い受講者を対象とし、仏教・真宗を学ぶ機会を提供できるよう、特にインターネットを活用した仏教教育機会の提供システムを研究・開発し、その導入に向けて取り組んできた。

### 研究活動の概要

2020・2021年度と継続して、Eラーニングの実施に必要なコンテンツ、システム、運用体制の確立を課題として取り組んできた。そして最終年度である本年度は、①「仏教入門」講座の撮影と編集、②公開配信に向けた課題の検討を中心に研究活動を行った。

#### ①「仏教入門」講座の撮影と編集

コンテンツ面においては、全9回の構想のもと、釈尊の生涯と思想をテーマにした仏教入門講座の完成を目指した。その上で特に、仏教入門に適した『改訂大乗の仏道一仏教概要一』（東本願寺出版、2016年）および同『資料編』（同、2019年）をもとに、コンテンツ開発を行った。「仏教入門」講座として、以下の全9回の講義によって構成した。

- 第1回 はじめに  
講義担当：本学教授 木越康
- 第2回 仏教成立の時代背景  
講義担当：本学教授 箕浦暁雄
- 第3回 青年ゴータマの歩み  
講義担当：本学教授 箕浦暁雄
- 第4回 沙門となったゴータマ  
講義担当：教学研究所助手 松下俊英
- 第5回 苦の原因をたずねて

講義担当：教学研究所助手 松下俊英

- 第6回 最初の説法  
講義担当：本学教授 箕浦暁雄
- 第7回 仏弟子の誕生  
講義担当：本学講師 戸次顕彰
- 第8回 釈尊の入滅  
講義担当：本学講師 戸次顕彰
- 第9回 おわりに  
講義担当：本学教授 一楽真

以上のように全9回にそれぞれ担当者を配当し、各自が原稿を作成し、それを全体研究会の組上に載せ、内容について討議を重ね、講義原稿を完成させていった。また写真や地図を持ち寄り、キーワードの提示や紹介する仏典の文章・言葉を検討した。そして、それらを適宜、講義映像に取り込んでいく作業を、プレゼンテーションツールであるパワーポイントを活用するなどして視聴覚教材としてのメリットを生かせるよう配慮した。その上で、準備の整ったものから順次撮影を行うこととし、2021年度には、10月に第1回、12月に第7回、2022年3月に第6回の計3回分、そして本年度は、6月に第3回と第5回、7月に第8回、10月に第6回、2023年1月に第2回、そして2月に第9回の6回分の撮影を行い、全9回の収録を終え、随時編集作業を行った。

#### ② 公開配信に向けた課題の検討

さらに実運用開始に向けた体制について検討した。システム面においては、既存プラットフォームを活用した「仏教入門」講座の配信の実装を進めるため、諸機関と連携し課題の共有に努めた。また実際の公開を想定し、広報や申し込み方法、さらには、各回に設けられたQ&Aの受信返信方法などについて協議を行った。しかし、今後の大学内での安定的運用については課題も多く、引き続き関係部署が協力連携して運用体制を構築していく必要性を確認した。

「真宗入門」に関しては、仏教教育センターや真宗学科の教員が連携して、継続的に撮影から配信までを実施できるような体制を構築しなくてはならない。そのためにも本研究班で確立したコンテンツ開発、撮影方法、システム構築を基に、それらを十分活用した上で、公開に向けた準備、撮影を行う必要がある。

今後も継続してEラーニングによる教育機会提供の体制を整えることで、大学全体における新しい教育システムの構築へとつながることが期待される。

## 国際仏教研究

### 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授 井上 尚実  
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。

2020年度以来、新型コロナウイルスの感染拡大（COVID-19）により、国際的な研究活動は大きな影響を被ってきたが、2022年度になって状況は少しずつ改善し、国際学会やワークショップ参加のための海外渡航も夏頃から可能になってきた。そのような中で欧米班とアジア班は、それぞれ下記のようなテーマを掲げて研究活動を進めた。

①欧米班：「真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する」

②アジア班：〈中国〉「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院古代史研究所との共同研究。〈ベトナム〉『日本仏教概説』の出版。

以上のようにテーマ掲げたが、いまだに残っているCOVID-19の影響のため、一部の計画については変更を余儀なくされた。各班の研究成果の概要は以下の通りである。

#### 〈欧米班〉

##### ① 国際学会への参加

2022年11月にアメリカ合衆国コロラド州デンバーで開かれたアメリカ宗教学会（AAR）において、以下のようにEBS設立100周年記念パネル発表を行った。

テーマ：“The Eastern Buddhist Society: Past and Future”（EBSの過去と未来）

パネリスト：日沖直子（南山大学研究員）、マイケル・コンウェイ研究員（EBS内部顧問）、マーク・ウンノ（オレゴン州立大学教授）、ジョン・ロブレグリオ嘱託研究員（EB誌編集者）。

AARとEBS100周年記念パネルの詳細については本所報掲載の参加報告を参照。

##### ② 翻訳研究

カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所・

龍谷大学世界仏教文化研究センターと合同で『歎異抄』翻訳研究ワークショップを継続的に開催した。2022年度は久しぶりに対面での実施が可能となり、COVID-19の影響で開催できなかった分の遅れを取り戻すために9月に1回を加え、以下の3回のワークショップが実施された。

- 1) 第8回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ  
8月5日（金）～7日（日）大谷大学
- 2) 第9回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ  
9月2日（金）～4日（日）カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所
- 3) 第10回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ  
2023年3月10日（金）～12日（日）カリフォルニア大学バークレー校（会場は浄土真宗センター）

このワークショップの詳細については、本所報掲載の参加報告を参照。

##### ③ 国際シンポジウムの成果出版

*Adding Flesh to Bones: Kiyozawa Manshi's Seishinshugi in Modern Japanese Buddhist Thought.*  
Edited by Mark L. Blum and Michael Conway  
(University of Hawaii Press, 2022.4.30)

すでに『研究所報』80号にその表紙写真とともに概要を報告したが、2015年に開催された *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology*. Edited by Mark L. Blum and Robert F. Rhodes (SUNY Press, 2011) 出版記念シンポジウムの成果が、マーク・L・ブラム嘱託研究員（カリフォルニア大学バークレー校教授）とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集によりハワイ大学出版から本年4月30日に出版された。2人の編者によって付けられた *Adding Flesh to Bones* という書名は「骨〔骸骨〕に肉付けをする」という意味であり、本書は真宗近代教学の英訳基礎研究としての *Cultivating Spirituality* に対して、内外の近代真宗教学に関する最新研究の成果によって肉付けを行なっている。17本の論文から成る490頁の重厚な学術書であり、*Cultivating Spirituality* と合わせて英語圏における近代浄土真宗研究の記念碑的な成果である。

##### ④ 国際シンポジウムの企画と準備

2023年12月15日（金）～17日（日）に本学を会場に開催予定の“Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World's Religious Traditions”（世界の諸宗教における悟りと智慧と変容）をテーマとするシンポジウムの企画立案と準備を進めた。この

国際シンポジウムは、もともと 2017 年度に大谷大学が「仏教を基軸とする国際的研究拠点の形成と〈人間学〉の推進」という 5 年プロジェクトにより文部科学省「私立大学研究ブランディング」事業（タイプ B：世界展開型）に選定された折、その最終年である 2021 年に開催が計画されていたもので、その後「私立大学研究ブランディング」事業そのものが文部科学省の不祥事により 2019 年度で打ち切られたため、本学の近代化 120 周年記念事業として開催することが決まっていた。しかし COVID-19 の影響で開催が延期されてきたという経緯がある。COVID-19 の世界的な感染状況が改善して開催の見通しが立ったため、2023 年の 12 月中旬の 3 日間、ハンガリーの学術交流協定校 ELTE の研究者を含む内外の仏教・キリスト教・イスラム教・ユダヤ教・マニ教など諸宗教の研究者の招聘するシンポジウムの具体的な計画を進めた。

#### ⑤ 東方仏教徒協会の事業

2021 年の東方仏教徒協会（The Eastern Buddhist Society）設立 100 周年を機に、英文仏教学術誌 *The Eastern Buddhist* は The Third Series をスタートさせたが、2022 年度はその Volume 2, Number 1 と Number 2 の 2 冊を発行した。Number 2 の巻頭にはジェームズ・ドピンズ嘱託研究員（オーバーリン大学名誉教授）による“D. T. Suzuki: A Brief Account of His Life”（「鈴木大拙小伝」全 83 頁）が掲載されている。これは詳細な参考文献リストを含む最新の伝記研究である。

#### ⑥ オンラインによる公開講演会

COVID-19 の影響により 2020 年度 2021 年度と 2 年続けて国際仏教研究の公開講演会を開催することができなかったため、今年度は東方仏教徒協会の *The Eastern Buddhist* 誌の編集とリンクする形で、以下のように 3 回のオンライン Zoom 配信による公開講演会を開催した。

- 1) 第 1 回 EBS 公開講演会（5 月 31 日）  
講師：Jørn Borup（デンマーク、オーフス大学宗教学部准教授）  
講題：“Who Owns Buddhism? Postcolonialism, Decolonialization and the Study of Religion”（仏教は誰のものか？ポストコロニアリズム、脱植民地化と宗教研究）
- 2) 第 2 回 EBS 公開講演会（12 月 6 日）  
講師：Lucia Dolce（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院教授）  
講題：“What Is Japanese Medieval Buddhism?:

New Perspectives from Tantric Ritual Material”（中世日本仏教とは何か：タントラ儀礼資料による新たな視座）

- 3) 第 3 回 EBS 公開講演会（2023 年 2 月 22 日）  
講師：James C. Dobbin（オーバーリン大学名誉教授）  
講題：“The Many Faces of D. T. Suzuki”（鈴木大拙の多面性）

第 1 回のヨン・ボルプ先生の講演については『研究所報』81 号 24～25 頁の報告を参照。第 2 回と 3 回の詳細については本号掲載の報告を参照。なお、第 1 回と 3 回講演の Zoom 録画データは The Eastern Buddhist Society ウェブサイトの LECTURE のページにアップロードされているのでオンラインで視聴できる。〈<https://ebs.otani.ac.jp/pg1424.html>〉

#### ⑦ 「女性と仏教」に関連する国際的研究交流

2019 年度に本学で開催した「女性と仏教」をテーマとする国際ワークショップに続き、COVID-19 の影響の中において可能な限り国際的な研究交流を継続した。「女性と仏教」をテーマとする国際的研究のデータベースを構築し、将来的にインターネットで公開することを念頭にデータの収集とインプットを継続した。

#### 〈アジア班〉

##### I. 中国社会科学院古代史研究所との学術交流協定に基づく研究活動

本年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、相互の訪問による公開研究会を開催することができなかった。なお、2015 年 12 月に開催した「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果としての論文集について、翻訳作業を進めており、来年度に刊行予定である。

##### II. ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

『日本仏教概説』出版に向けた作業を行った。Pham Thi Thu Giang 氏が日本語原稿の翻訳作業を行い、なお継続作業中である。なお、新型コロナウイルス感染症の影響により、十分な相互訪問はかなわなかったが、2023 年 3 月 1 日には Pham Thi Thu Giang 氏が来訪され、大西和彦嘱託研究員と共に、原稿の校正や出版に向けての詰めの協議を行った。

## 西藏文献研究

### チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授 三宅 伸一郎  
(チベット学)

本研究は、本学に所蔵される多数のチベット語文献のうち特に重要と思われる文献資料を

- (1) 専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること
- (2) なかでも貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開すること

ことを目的としている。2022年度は、2019年度からの3ヶ年の間に実施した研究のうち、成果が未完のままとなっていたものを完成させることに専念した。

そのうちの一つは、『ブトン仏教史』第1章の校訂テキストの刊行である。14世紀を代表する学僧であり、チベット仏教史上重要な役割を果たしたブトン・リンチェンドゥブ (Bu ston Rin chen grub, 1290-1364) による本書の第1章は、仏教における「法」の定義や、膨大な經典の分類、聴聞や講説の方法などを記した「仏教概説」であり、チベット仏教における規範的な仏道のありようを知る上で極めて重要なテキストである。校訂テキストの原稿は2021年度中に整っていたが、最終的な確認・校正作業を行い2022年6月30日に下記のタイトルで刊行した。

*Bu ston's Introduction to Buddhism: A Critical Edition of First Chapter of the Bu ston chos 'byung.*

刊行にあたっては、本学図書館所蔵のタシルンポ (bKra shis lhun po) 版 (no. 11841) をはじめ合計7種の版本・写本を校合に用いた校訂テキストに加え、第1章の詳細な科文を付し、160余にわたる引用箇所 of 典拠を示した。また、第1章の概要と、そこに見られる特徴 (特に世親『釈軌論 (Vyākhyāyukti)』に依拠することにより、声聞乗の思想を吸収している点)、校合作業から見てきた各写本・版本の系統関係に関する試論をまとめた序文を付した。

もう一つ未完であった、モンゴル国立大学との共同研究第2期 (2016-2018年度) の研究成果報告書については、報告要旨の翻訳も含め原稿も全て整い、年度内刊行の予定で入稿した。しかし、モンゴル語の表記に用いられるキリル文字の組版にトラブルが生じ、その解決のためには膨大な作業が必要となったため、残念ながら、年度内に刊行することができなかった。

以上の研究作業に加え、2021年度からの継続とし

て『モンゴル仏教史・宝の数珠』の訳注作成を行った。この作業は、伴真一郎嘱託研究員によって行われ、その成果は『真宗総合研究所研究紀要』(40)に掲載されている。

## 清沢満之研究

### 清沢満之の生涯と思想の研究 —西方寺所蔵文献の研究—

研究代表者・准教授 西本 祐攝  
(真宗学)

#### ■はじめに

本研究は、清沢満之の生涯と思想の研究を進めることを目的に、その研究において重要な意義を有する西方寺所蔵清沢満之自筆文献（以下、西方寺所蔵文献と略）についての研究を行っている。

本研究では西方寺所蔵文献の影印（36枚撮りフィルム248本分、総コマ数8500枚超）を所蔵している。これは、1998年度から西方寺の全面的な協力をいただき、西方寺所蔵文献の蔵書整理、文献調査、調査カードの作成、文献目録作成、写真撮影、内容精査等を行ってきたことによる。

それらのうち、現在、『清沢満之全集』（以下、『全集』と略）及び『全集』別巻等で公開済の文献はその3分の1程である。これは、『全集』及び別巻が主に清沢満之自身の著述を収録し、清沢満之が受講した講義ノートや書籍からの抜書、索引等は収録しないという方針で編纂されたことによる。

未公開文献には、清沢満之の育英教授、帝国大学、真宗大学寮の頃から後年に至るまでの文献が含まれており、帝国大学時代については「真宗学」「仏教学」「歴史学」「哲学」「生理学」「儒学」「数学・化学」「心理学」「語学」「和文学」等の受講ノートを確認することができる。これらは「清沢満之の思想形成を探る資料」としての価値を有し、また「関係教育機関でどのような教育がなされたのかという近代日本教育史の資料」ともなるものである。

本研究では、『全集』及び別巻に掲載されていない西方寺所蔵文献の翻刻・校正を継続的に行っている。これらの未公開文献について研究を進めることは、清沢満之の生涯と思想の研究に大きく資するものである。執筆時期も分野も内容も多岐に及び、すべてを公開することは一朝一夕に実現可能なことではないが、貴重な清沢満之自筆文献の影印を預かる本研究が継続的になすべき研究であり、その内容精査とともに公開に向けた研究活動を継続している。

本年度は、3カ年の研究期間の2年目にあたり、初年度に着手した西方寺所蔵文献についてその全貌を再確認する研究を継続して行った。具体的には、次の二点を柱とした研究である。

- 1、西方寺所蔵文献（未公開分）の研究
  - 2、西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究
- 以下に、その活動概要について述べる。

#### ■活動の概要

西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして36枚撮りフィルム167本分、総文字数3,703,420字である。3カ年の研究計画に挙げた西方寺所蔵文献リストの作成に向けて、基礎的な文献確認作業を継続した。この確認とともに、各文献の執筆年時、性格、内容を踏まえた解題を作成し、執筆年時が判明したものについては、清沢満之の年譜にプロットしていく作業を並行して行っている。

その概要は、次の三点である。

- 1、西方寺所蔵文献のリスト整理
- 2、未公開文献の校正・整理・解題等作成
- 3、その他

#### 1、西方寺所蔵文献のリスト整理

本研究は、西方寺所蔵文献の調査時の調査カードをもとにした文献リストを所有している。この文献リストは調査時に文献整理を目的として作成したものであり、文献ごとに通し番号を付し、それぞれの形態や分量などの詳細を記録したものである。しかし、旧来の文献リストでは、本研究が所蔵する各写真のいずれが『全集』収録・未収録かについて整理されていない。昨年度に引き続き、それらを明確に判別したリストを新たに作成する作業を継続的に行った。旧来の文献リストは写真フィルム番号ごとに整理されているが、それでは全貌を把握していくには十分とは言えない面があり、フィルム番号内の写真番号（以下、写真番号と略）ごとに詳細に分類した新たなリストを作成する作業を行っている。

この方針に基づいて、以下の二つに分類して西方寺所蔵文献の新たな文献リストを作成しその充実をはかっている。

- I. 『全集』収録済文献リストの充実
- II. 『全集』未収録文献リストの充実

#### I. 『全集』収録済文献リストの充実

『全集』収録済の西方寺所蔵文献リストを整理し、『全集』の収録巻・頁と写真フィルム番号・写真番号が対応するよう確認する作業である。『全集』に掲載された文献が西方寺所蔵文献の写真フィルム内のいずれの写真番号の文献に基づくかについてのより詳細なリストを作成することで、その対応関係を容易に確認することが可能となる。

この作業については、本年度内に、『全集』および別巻収録済文献のすべての写真フィルムについての作業を終えることができた。

## II. 『全集』未収録文献リストの充実

『全集』等に未収録の未公開文献について確認していくために、その詳細な分類リストを作成する作業を昨年度に引き続き行った。西方寺所蔵文献には、一つの文献内に性格の異なる記述が複数存在するものを多く確認できる。

例えば一冊のノートにも和文文献と英文文献やメモ等が混在しており、その内容を一つの文献としてリストに記載することは適切ではない。旧来の文献リストはそれらを明確に分類するものではなく、未公開文献の詳細を把握する上では十分ではない面があった。そのためノート内の記述ごとにその内容が区切られると考えられ得る箇所での区分し、文献名称の有無等を基準とする種別を示す分類記号を定めリストに記載していく作業を行った。

この作業については、本年度内に、対象のすべての写真フィルムの確認作業を終えた。

\*上記の通り、同じ写真フィルム内に『全集』収録・未収録の文献が混在している。そのためⅠ・Ⅱの作業で重複して確認したフィルムがあり、今年度、実際にⅠ・Ⅱで確認したフィルム数は107本分である。

## 2. 未公開文献の校正・整理・解題等作成

未公開文献の各文献内容を把握していくために、上記したリスト作成と並行して、文献ごとの内容確認を踏まえた簡易的な解題（200字程度）を作成し、さらには文献内の目次を付す作業を昨年度に引き続き行った。文献ごとの性格（講義筆録、メモ、目録、索引等）、執筆時期、執筆経緯等を把握していくことを目的とした研究活動である。

これらの作業において新たに執筆時期を確認できた文献がある。それらの成果を清沢満之の生涯と思想の研究に反映していくため、『全集』第9巻に掲載する清沢満之の年譜に、その情報を加えていく作業を行っている。これにより、これまで明らかになっていない清沢満之の生涯における事績や思想形成過程についても明らかにすることができるものと考えられる。

これらの作業は、概ね以下の三点に分類できるものである。

- I. 未公開文献の内容確認
- II. 解題・目次の作成
- III. 年譜の作成

文献内容の確認作業に際しては、未公開文献の写真

と翻刻資料に基づいて丁寧に把握する作業を行った。解題・目次を作成する際には文献内に記される情報（執筆時期、講義筆録と思われる文献についての講義担当者、テキスト名等の書誌的な情報）を確認しつつ文献内容・性格等を明確にしていく作業を行った。本年度は写真フィルム65本分について作業を行い、対象となるすべての写真フィルムについての確認作業を終えた。

また、未公開文献内には清沢満之の学生時代の記録が多く残されている。これらを年譜に反映させていく作業では、各年の事績と並行して各在籍年度、期別ごとにその事績をあきらかにできるよう年譜の作成を進めた。これらの作業を通して、清沢満之の育英教校時代、帝国大学時代等における思想形成の一端を明らかにすることができるものと期待される。

## 3. その他

上記した1、2については、検討事項を隔週ごとのミーティングにおいて確認しつつ、年3回の全体会議にはかり、確認作業をすすめた。その日程等については『所報』の彙報欄にて報告する通りである。

2022年度までに、すべての文献について基礎的な確認作業を終えることができたが、その過程で、各文献についての執筆時期等、個別に調査すべき課題も見つかっている。年時を確定することが困難と考えられるメモ、文字の練習等の記述もあるが、2023年度はできるだけ、それらを確定する作業を重ねていく。検討内容の詳細については、本研究の研究成果として、本研究所『紀要』等にて報告していく予定である。

## 大谷大学所蔵仏教写本研究

### パーリ語貝葉写本の研究 —保存、整理、情報収集および ネットワーク構築を中心に—

研究代表者・教授 DASH Shobha Rani  
(仏教学)

大谷大学には、パーリ語、サンスクリット語等で書かれた仏教に関する写本が数多く所蔵されている。その一部はある程度整理され、研究されているが、未整理で研究されていないものも多く残っている。大谷大学所蔵の写本の中の1900年にタイ王室から寄贈されたと思われるクメール文字、ビルマ文字とモン文字で書かれたパーリ語貝葉写本群が日本最大級のものと言われ、研究者の注目を浴びる。

本研究は、これらの写本の保存、整理と利便性、そして学術研究の準備を整えることを主な目標とする。そのため、貝葉写本の高度なデジタル化、上記の『貝葉写本目録』のデータベース構築、写本が包まれていると思われる包み布の研究、関連資料の収集、ローマ字転写テキストや校訂本の作成、翻訳などを中心に作業を行なう。そのために必要な資料を収集する。これに加えて、写本研究に基づき、南アジア・東南アジアを中心にその文字、言語、文化、信仰などの国際的・学際的な研究を行うことおよび関連資料収集、共同研究の実施および研究者・研究機関とのネットワーク構築を目指すことも目的とする。

このような目的を達成するために2022年度は以下の研究活動を実施した。

#### ① ローマ字転写テキスト作成

クメール文字の一部の写本のローマ字転写テキスト(Diplomatic Edition)の作業は、現在計画中である。完成したテキストを研究資料として研究者に提供する予定である。そのため、2023年3月18日(土)～2023年3月27日(月)までタイのDhammachai Tipitaka Projectを訪問し、Suchada Srisetthaworakul 嘱託研究員およびその他複数名のネイティブの研究者の協力を得、文字確認作業を行った。それと同時に、Dhammachai Tipitaka Projectの独自の技法による文字入力、写本の内容の比較などの作業の見学を行なった。これらの技法を習得し、今後本研究班の作業に活用する予定である。

#### ② 国際ネットワーク構築

2022年9月9日(金)～2022年9月15日(木)までタイへ赴き、本班の嘱託研究員のSuchada Srisetthaworakul博士の協力のもと、現地の研究者との共同研究や本研究班の研究の協力について話し合った。

マヒドン大学、マハムクト仏教大学、シルパコロン大学の研究者たちから積極的な反応が得られた。パーリ語、写本研究および東南アジアとりわけタイの宗教文化に長年研究されている国際的に著名なPeter Skilling博士と会い、本研究の趣旨を説明し、今後の指導をお願いした。博士に写本校訂について貴重なアドバイスをいただいた。大谷大学所蔵のタイからの貝葉写本の研究を現地の研究者およびその他の研究者たちの協力を得ながら行いたく、今後も研究者同士のネットワークの構築を続けていく予定である。

2023年2月27日(月)～2023年3月2日(木)までではインド中央政府の文化省(Ministry of Culture)のもとにあるNational Mission for Manuscripts(以下、NMMと略す)において研究活動を行なった。今年20周年を迎えたNMMは様々な写本の研究、教育、保存、修復、そして若い研究者の育成など幅広い分野で写本に関する教育・研究をサポートするインド最大の国立機関である。詳細について当機関の公式ウェブサイト(www.namami.gov.in)を参考にされたい。

研究班の研究目的や研究活動を国際的に公にするために以下の3回の研究発表を行った。

(1) 発表題名: Manuscript Studies: A Tool to Understand the Culture of South and South-east Asia (インド・Woxsen 大学主催オンライン国際シンポジウム 'Situating South Asia in the Global Academic Discourse' において。発表日: 2022年12月1日)

(2) 発表題名: "Buddhist Manuscripts and Its Studies: A Glimpse of Otani University Collection" (オンラインシンポジウム 'National Seminar on Manuscript Heritage of India: Its Past, Present and Future' において。発表日: 2022年12月24日)

(3) 発表題名: "Indic Manuscripts in Japan" (National Mission for Manuscripts において。発表日 2023年3月1日)

#### ③ データベース構築

東南アジアのパーリ語仏教写本の Descriptive Catalogue である『大谷大学図書館所蔵 貝葉写本目録』大谷大学図書館出版(以下、『大谷貝葉目録』と略す)が1995年に出版されている。当目録はその当時の特別な技法と機材を用いて刊行されたが、それは



現在のパソコンやソフトウェアに対応しないようである。そのため、目録のデータ入力が必要不可欠である。デジタル入力の完成後、研究の利便性を図るため、データベースを構築する予定である。

ゆえに、インド東部・オディシャ州のブバネシュワルに位置する大谷大学の協定大学である Kalinga Institute of Industrial Technology (KIIT) 大学の Computer Science 学科の教員2名と15名の学生たちから協力をいただき、本データベース構築作業を実施する予定である。そのために2023年2月に現地へ赴き、本班員葉写本目録のデータベース構築に関して説明会を開催した。Excelで入力されているデータを見やすい形でレイアウトを作成し、検索できるようにすることを KIIT 大学の教員や学生たちの協力を得て実施する予定である。

#### ④ ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究

写本研究の総合的で新たな研究及び技術・知見の集積を目的として、2021年度よりハイデルベルク大学の Department of Cultural and Religious History of South Asia と提携して立ち上げた「Manuscriptology and Digital Humanities」という共同研究プロジェクトのもと、国際ワークショップや研究発表会などを定期的に開催している。2022年度は zoom を用いて合計7回実施した。

##### ○ 第1回公開講演会

題名：Presentation of the Muktabodha Indological Research Institute

発表者：Dr. Borayin Larios (University of Vienna)

##### ○ 第2回公開講演会

題名：Jam Today: Managing Large Manuscript Traditions with Digital Humanities Tools

発表者：Prof. Dr. Dominik Wujastyk (University of Alberta)

##### ○ 第3回公開講演会

題名：Palm-leaf Manuscripts in Southeast Asia: Demonstration of Creating a Database of Pāli Tipitaka (Survey, Digitization and Transcription)

発表者：Dr. Suchada Srisethhaworakul (Mahidol University)

##### ○ 第4回公開講演会

題名：Editing the Śivadharmā Corpus

発表者：Florinda de Simini (Università di Napoli L'Orientale)

Dominic Goodall (EFEO, Pondicherry)

Csaba Kiss (Università di Napoli L'Orientale)

Kengo Harimoto (Università di Napoli L'Orientale)

##### ○ 第5回公開講演会

題名：Two Sets of Digital Tools for the Study of Chinese Buddhist Texts

発表者：Prof. Michael Radich (Professor of Buddhist Studies, HCTS, Heidelberg University)

##### ○ 第6回公開講演会

題名：When Dealing with a Hundred Pāli Manuscripts: Editing Subhasutta of the Dīghanikāya

発表者：Dr. Bunchird Chaowarithreonglith (Dhammachai Tipitaka Project, DCI Center for Buddhist Studies, Ayutthaya)

##### ○ 第7回公開講演会

題名：Documenting and Editing Inscriptions from the Kathmandu Valley and Beyond

発表者：Manik Bajracharya & Rajan Khatiwoda (Heidelberg Academy of Sciences and Humanities)

これらの講演の詳細について <https://www.sai.uni-heidelberg.de/krs/forschung/manuscriptology-and-digital-humanities.html> を参照されたい。



第3回公開講演会のオンライン発表様子

## 大谷大学史資料室

### 大学史関係資料の収集・整理

研究代表者・准教授 藤元 雅文  
(真宗学)

大谷大学史資料室は、大谷大学の公文書および大学の歴史に関する資料の収集、整理・管理を主な目的としている。そのほか、所有する資料の貸出依頼や閲覧依頼等の対応も行っている。

大学史資料のほかにパンフレットやノベルティなど大学発行物を保管していくことも目的としている。

2022年度の主な活動として、①所蔵資料および寄贈資料の整理、②所蔵資料・データ調査・資料貸出、③所属している研究会への参加を行った。

#### ①所蔵資料および寄贈資料の整理

本資料室が所蔵する資料、特に大判写真について保管場所の整理を行った。また、他機関からの寄贈図書、パンフレットの受入れ、整理を行い、その図書目録や機関の住所録を作成した。

#### ②所蔵資料・データ調査・資料貸出

学外から1件、所蔵資料に関する問い合わせがあり、所蔵資料2点の貸出を行った。

#### ③所属している研究会への参加

関西大学千里山キャンパスにて、2022年5月25日(水)に開催された全国大学史資料協議会西日本部会2022年度総会・第1回大会に出席した。また、同日に開催された関西大学博物館特別展示室見学会にも参加し、他大学における大学史資料の管理・活用について知見を深めた。

## デジタル・アーカイブ資料室

### 大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブの構築

研究代表者・准教授 藤元 雅文  
(真宗学)

デジタル・アーカイブ資料室の主な目的は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資産をデジタル化したデータの整理・保管および研究資料としての公開にある。2022年度の主な活動は大谷大学図書館古典籍のデータベース構築である。

大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースについて、今年度も登録作業を進め、今年度分とこれまでの分と合計すると公開準備件数は601件となる。また、2023年3月時点での古典籍公開件数は17,365件となる。

なお、本年度より「大谷貝葉」に関する取り組みは大谷大学所蔵仏教写本研究へ移管した。

## 東京分室指定研究

宗教と社会の関係をめぐる  
総合的研究

## —現代社会における宗教と共生

研究代表者・教授 福島 栄寿  
(近代日本仏教史／近代日本思想史)

はじめに 多様な価値観を内包する現代社会において、新型コロナウイルスの世界的流行を始め、私たちは生活様式など様々な変化を強いられているが、宗教のあり方も問われている。また現代社会において、宗教が果たすべき役割やその可能性をより多角的な視点から見直すべきとの声も強まっている。

本研究の目的は、そうした現代社会が内包する諸課題について、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことである。特に2022年度の研究計画では、「現代社会における宗教と共生」をサブテーマに設定し、特に「共生」という鍵概念を手がかりに、私たちと宗教の多様な関係を考察し、現代社会における宗教の役割の解明を念頭に置いて取り組むことを課題とした。以下、その具体的取組みと成果を概観したい。

1. 本研究の取組みは、大きく二つのアプローチからなされている。①各研究員の各自のディシプリンに基づく研究課題に関する取組み、②室長が主導し、全研究員が共同で実施する取組み、である。

①の一つ目として、各研究員を研究班の代表とする取組みがある。この具体的な内容については、各研究員の個人研究班の取組みとして本所報に報告しているので、参照されたい。東京分室内では、年度初めに、各研究員が集まり、各自の研究の取組みの振り返りと新年度に向けた研究計画を報告する時間を設けている。そこでは、各研究員が、報告内容を踏まえて自由に意見交換を行い、各自の研究活動の向上に繋げると共に、共同研究を進めていくための有益な情報交換を行っている。

①の二つ目として、各研究員が、各自の研究課題の検討を目的に企画の中心を担当して実施する【公開シンポジウム】と【公開研究会】がある。2022年度は、それぞれ一回ずつを開催することができた。

【公開シンポジウム】であるが、荻翔一研究員が中心となり、企画を担当し開催した（2022年11月26日（土）・ハイブリッド開催）。テーマは、「宗教と多文化共生—「在日コリアンの宗教」の現在—」。荻研

究員自身の研究課題は、特に在日コリアンと宗教の多様な関係のあり方を明らかにすることであるが、本シンポジウムも、荻研究員の研究課題の検討を目的に、4名の研究者を招聘し、開催された。宗教、特に在日コリアン（特に一世）が中心だった宗教が、現在、いかなる変化を遂げ、どのような取組みをしているのか。従来の研究にはない宗教者や宗教団体への視点を導入し、「多文化共生」の取組みにおける宗教の固有の役割やその特徴の検討を行うことができた。詳細は、本所報を参照されたい。コロナ禍の中ではあったが、大谷大学メディアホールを会場に、対面とオンラインとのハイブリッド形式で開催し、学内の教職員や学生も対面で参加してもらうことができた。

【公開研究会】としては、陳宣聿研究員が中心となり、企画を担当し開催した（2023年2月13日〈月〉・オンライン開催）。テーマは、「胎児の『人格』とスピリチュアリティ」。陳研究員自身は、現代における胎児観の変容と宗教との関わりについて研究しており、本公開研究会も、陳研究員の研究課題の検討に沿う形で開催された。報告者の橋迫瑞穂氏（大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター（UCRC）研究員ほか）は、女性のスピリチュアリティに関する研究に取り組んできた社会学者で、著書に『妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティ』（2021年、集英社）がある。橋迫氏によれば、出生前の胎児にも「人格」が想定され、「妊娠・出産という極めて私的な体験が聖性を付与される一方で、聖性を帯びた「母性」を身に着ける体験として妊娠・出産が意味づけされることでジェンダー規範との葛藤をもたらしてきた」（本誌掲載の開催報告）という。そして、この「聖性」が、スピリチュアル・コンテンツと結びついていくのだという。45名の参加者があり、報告後の質疑応答も熱心に行われ、議論を深めることができた。

本所報の「彙報」にも記載しているように、これらの公開シンポジウムと公開研究会の開催にあたっては、テーマを深められるよう、東京分室内において数度の事前勉強会を実施し、準備を進めた。この勉強会では、登壇者の著書や論文、報告者の著書などを取り上げ、各研究員が分担して報告し、議論しつつ課題を共有することに努めた。上記の公開シンポジウム、公開研究会とも、多様な価値観を内包する現代社会における宗教の多様なあり方や現れ方について、新たな知見を得ることができた。またそれらの知見を多くの参加者と共有し、検討することができた点は、大変有意義であった。

2. 次に②の室長が主導し、全研究員が共同で実施する取組み、について。指定研究の研究課題を検討

することを目的として、具体的には、現代沖縄における宗教事情をテーマに取り上げ、全研究員が参加し、沖縄への現地調査を実施した。調査内容の詳細は、本所報を参照されたい。

調査に先立ち、東本願寺沖縄別院職員で法政大学沖縄文化研究所国内研究員の長谷暢氏を招聘し、研究会を実施した。長年、沖縄県内において僧侶として布教活動を実践されてきた経験を踏まえたところから、「沖縄別院の歴史と取組み紹介」と題して、報告をいただき、質疑応答を通して、沖縄における真宗布教の歴史と現状について理解を深めることができた。

現地調査では、波上宮・護国寺・泊外人墓地・普天間バプテスト教会・日本キリスト教団佐敷教会・真宗大谷派東本願寺沖縄別院・浄土真宗本願寺派沖縄別院・国立ハンセン病療養所愛楽園・金城実氏アトリエを訪れた。特に、長谷氏が、日頃交流されているキリスト教教会や西本願寺沖縄別院の方々の他、葬儀社の方への連絡調整を担っていただいたことで、大変充実した調査を実施することができた。この場を借りて、長谷氏をはじめ、調査にご協力をいただいた方々に御礼申し上げたい。

調査現場では、各研究員が分担し、聞き取り調査を実施したが、各々が、それぞれの研究課題に引きつけながら、沖縄の宗教事情について考えるヒントを得ることができたと思う。

この調査を通して印象に残ったことを幾つか挙げておきたい。例えば、本土では、檀家制度という江戸時代から続く寺院と信徒との関係が自明となっているが、沖縄では、そうした寺院と信徒との関係は存在しない。それ故に、布教活動を始めた寺院や僧侶のあり方は、本土と同様というわけにはいかないのが、様々な工夫や取り組みがなされている。

東本願寺沖縄別院では、遺族へのグリーンケアの会を定期的に開催し、また供物の菓子を子ども施設へ寄附する活動を続けているという。護国寺の名誉住職・名護俊海氏への聞き取りでは、戦後早くから始まった宗派の垣根を超えた沖縄仏教会の平和への取り組みについて知ることができた。普天間バプテスト教会では、担当牧師・神谷武宏氏より隣接する保育園の屋根に米軍ヘリの部品が落下した事件を契機として始まった、園児の保護者共々の基地への抗議活動について話を聞くことができた。基地問題については、沖縄のキリスト教界も仏教界も一致団結して取り組んでいるという。本土の宗教事情とは異なる沖縄独自の宗教事情を考え、合わせて、所謂外来宗教としての浄土真宗が、キリスト教が、どのような受容の歴史を辿り、現在に至るのか。そのようなことを考える上での重要なヒントを得

ることができたように思う。最後に訪問した金城実氏とは、私自身、毎年のようにお会いし、お話しを聞く機会に恵まれてきたが、今回は、各々の研究員にとって初めてのアトリエ見学であり、金城氏との邂逅の機会となった。各研究員が、一人ひとり順番に、各々の研究テーマを中心に自己紹介をする時間を持つことができた。芸術家であり社会活動家であり、琉球親鸞塾を主宰する御年 85 歳となられた金城氏と初めて対峙した各研究員が、皆、緊張しながら氏のアドバイスの言葉に真剣に耳を傾けていた姿が印象に残っている。

今回の調査に際しては、各々の研究員が、宗教と共生という本指定研究の研究課題を検討していくためのヒントを何か一つでも掴んでもらえたら、という期待を抱いて実施したが、本所掲掲載の各研究員の調査報告に目を通しつつ、その期待は叶えられたのではないかと感じている。むしろ、共同研究という点では、まだそのわずか一歩を踏み出したばかりである。今後も継続的に沖縄への調査を実施しつつ、研究課題について検討して参りたい。

**おわりに** 最後に、東京分室長としての一年間を振り返ってみたい。着任当初より江森英世真宗総合研究所所長から東京分室の運営面の課題としてうかがっていたのは、コロナ禍のためもあり、この数年、東京分室の研究活動を大谷大学内で認知してもらえる機会が少ないということであった。合わせて、各研究員にも、東京分室の母体である大谷大学のことを、知ってもらえたら、とも思い、この一年間を通して、意識的に大谷大学内の施設で、公開シンポジウム、研究成果報告会等を開催することを試みた。東京分室と各研究員の研究活動等に関して、学内での認知度の上昇に繋がれば、幸いである。加えて、本学大学院の「プレFD実践演習」という授業で、2名の東京分室の研究員がゲストスピーカーに招聘され、研究活動等について紹介させていただいたことは、更なる研究活動の場を求めようとする院生に東京分室の存在と取り組み内容を知ってもらい良い機会となった。当該授業担当の村山保史教授に、御礼申し上げたい。

何はともあれ、あつという間の一年間であった。東京分室の主役である各研究員の活躍を応援しながら、試行錯誤を継続して参りたい。

## 2022(令和4)年度「一般研究」(予備研究)研究成果報告

### 一般研究 (予備研究)

#### 乳児の物の受け取り動作の成立過程を共同注意の枠組みから解明する関係論的発達研究

研究代表者・教授 脇中 洋  
(発達心理学・法心理学)

本研究では、大人から乳児にももの受け渡しが成立する生後9カ月前後に焦点を当て、乳児が手のひらを下にして掴み取る時期から、手の平を上にして受け取るように変容していく過程で、大人と乳児が互いの動きをどのように察知して手の動きを調整しているのかを詳細に分析し、乳児が対物活動と対人関係を統合させる仕組みを明らかにすること、ひいては共同注意が成立する発達機序を解明することを目的としている。

縦断的調査対象となる乳児の月齢は生後7か月から12か月程度(約6か月間)とし、2022年度中に2週間に1回程度の録画観察を行うとともに、新版K式発達検査2020を実施し、養育者への聞き取り調査を行う予定だった。また療育施設で自閉症児のもの受け渡しに関する知見も得る予定だったが、年度を通じたコロナ禍の影響で、保育園や療育施設において新たなデータを取得することができなかった。さらに翌年度の研究計画では、健常児と自閉症児との比較に加えて、欧米圏の乳児との比較研究へと発展させる計画であった。

実際に2022年度に遂行したのは以下の内容となった。まず新版K式発達検査2020の追加補充セットを購入し、もの受け取りに使用する赤積み木を必要分20個準備した。

またカナダBC州ビクトリア市のビクトリア自閉症児協会(VSCA: Victoria Society for Children with Autism)の会員と連絡を取り、3月9日にはVSCA事務所を直接訪問して研究目的を伝え、2023年度以降の協力を依頼した。翌3月10日にはVSCA会員家族が教会を会場に集う場面に訪れ、より多くの会員家族に研究目的を伝えて協力を依頼した。(なお今回のビクトリア訪問では、他の研究課題との関係で、パンデミック後のビクトリア脳損傷協会VBISや更生保護施設のBill Mudge Houseなどの現状も調査した。)

以上の準備を踏まえて2023年度には保育園や療育施設に研究協力を依頼し、国内外を通じた具体的な観



VSCA事務所が入っている建物(3月9日)



VSCA事務所で研究協力を依頼した(3月9日)



VSCA会員家族が懇談する様子(3月10日)

察データを取り始める予定である。

## 2022(令和4)年度東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

### 個人研究

#### 現代における在日コリアンのキリスト教信仰の研究—1960年代以降の韓国社会の宗教変動に注目して—

研究代表者・元東京分室 PD 研究員 荻 翔一  
(宗教社会学)

本研究は、現代における在日コリアンのキリスト者の信仰生活の特徴を明らかにすることを目的とするものである。特に本研究では、一世とは異なり、日本で生まれ育った二世は、いかにしてキリスト教信仰とエスニシティの問題を関連させて捉えていったのか、また1960年代以降、韓国社会でキリスト教（特にプロテスタント）が急成長したことや近年のグローバル化を背景に、1980年代以降に到来した韓国からのニューカマーは、在日二世の信仰生活にいかなる影響を与えていったのか、という点に着目した。

本年度の研究成果は大別して、①在日コリアンと宗教をめぐる先行研究の成果と課題の析出、②在日コリアンキリスト者（特に青年層）の「民族」と「信仰」をめぐる議論の整理と分析、③在日コリアンキリスト者の信仰生活に関する聞き取り調査とその分析の3点があげられる。

まず①について、2019年までに刊行された在日コリアンと宗教の関係を主題とする日本語の学術論文・学術書を収集・整理し、その成果と課題を析出した。その結果、近年の動向として、宗教者・信者の文化的背景の多様化が論じられるようになっていながらも、そうした現象が、宗教組織や宗教儀礼の維持・継承、信者の信仰生活にいかなる影響を与えるのかという点については、未解明の点が多いという課題を明らかにした。こうした成果は、公開シンポジウム「宗教と多文化共生—「在日コリアンの宗教」の現在—」（於：大谷大学、2022年11月26日）で報告したほか、東洋大学アジア文化研究所のSDGs 動画（『「在日コリアンと宗教」研究の整理と課題』）として公開し、『アジア諸国の持続可能性（1）』（2023年）にて論文化した。

続いて②について、ニューカマー到来以前の1950-70年代前半の在日大韓基督教会の青年会資料をもとに、在日青年キリスト者（二世）の議論の変遷を整理した。その結果、60年代から70年代前半にかけて一貫して、一世が中心となる教会が在日の生の問題

（＝社会問題）に目を向けてこなかったことがしばしば指摘され、その閉鎖的な体質が批判されてきたことを確認した。ただし、60年代には信仰心をベースに在日の社会問題に取り組むことがしばしば主張されたものの、70年代前半になると社会問題に取り組むことは継続されつつ、60年代にみられた信仰心ベースの主張が「信仰至上主義」だと批判され、民族愛をベースに社会問題に取り組むこと、それが「真のキリスト者として立つことができる」という論調がみられるようになったことを明らかにした。こうした議論は、信仰とエスニシティを結合させた「在日キリスト者」である自己のアイデンティティ構築や、その生き方を方向付けようとした試みとして捉えられるといえる。本研究の成果は、日本宗教学会（於：オンライン、2022年9月10日）で報告した。

最後に③について、1980年代以降の在日コリアン二世の信仰生活を把握するため、東京および関西（大阪・兵庫）において聞き取り調査を実施した。その結果、1980年代以降、教会にニューカマーの韩国人が多く参与するなかで、彼ら／彼女らの存在が在日コリアン二世の信仰生活にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。具体的には、自らが所属する教会の選択という信仰生活を送るうえで重要な契機にニューカマーが関わる事例、ニューカマーの信仰心と比較して自身のそれを位置づける事例、到来するニューカマーに対抗するような教会運営を志向する事例があげられる。他方で、教会選択の背景に在日一世である親とのつながりに言及する調査協力者が少なからず存在しており、クリスチャンホームで育った在日二世の信仰生活において、家族ネットワークの要因は決して無視できるものではない。そのため、在日二世の信仰生活を分析するうえでは、在日一世の親を中心とする家族ネットワークに加え、近年到来したニューカマー双方の影響をみる視点が必要であると考えられる。

今後の課題として、在日二世個人々人のエスニック・アイデンティティの在りようを明らかにし、それがニューカマー（とその信仰スタイル）に対する評価といかにリンクしているのかを分析することで、信仰とエスニシティの結合（ないしは分離）の諸相を考察することがあげられる。

## 個人研究

現代社会における宗教と  
胎児生命観の研究研究代表者・東京分室 PD 研究員 陳 宣聿  
(宗教学)

宗教が現代社会における胎児観の変遷との関わりが、本研究の主要な研究関心である。報告者は主に「(1)『水子供養』儀礼への研究」と「(2)日本と台湾における『プロライフ運動』の展開に関する考察」の二つの側面を通して、調査を進んできた。以下は二つの側面について、それぞれの成果を提示していく。

## (1) 「水子供養」 儀礼への研究

前近代社会において、夭逝した胎児に対する関心が少なかった。葬送儀礼を通して送り出された成人の死者と異なり、胎児を含む夭逝死者は、葬儀を行わない（もしくは簡素な葬儀を行う）傾向を持ち、さらにその遺体処理には、遺棄、水に沈む、特殊な場所に埋めるなどの方法が見られる（Devereux, 1955, *A study of abortion in primitive societies*, Julian Press）。他方、出産環境や家族形態の変遷に伴い、現代社会で夭逝した胎児を一人の「死者」とみなし、その霊を慰撫する儀礼が生じてきた。日本においては、1970年代から1980年代にかけて流行り出した「水子供養」儀礼が代表的である。これは今までの先行研究において、水子供養を日本特有の宗教現象として扱うことが多く見られるが、報告者はそれに対して、台湾での類似儀礼、「嬰靈慰霊」との比較研究を行った。

夭逝した胎児を弔う儀礼に対する比較研究は、報告者が博士後期課程から継続する研究関心である。2022年度において、報告者は複数の学会・研究会において、異なる切り口からの研究発表を行った。その研究成果は以下ようになる：「〈水子供養〉の比較研究：台湾の事例を手がかりに」（女性民俗学研究会第720回例会、2022年4月24日）、「夭逝死者の表象物－現代台湾における『水子の位牌』をめぐって」（日本華僑華人学会、2022年10月23日）、「悪霊から我が子へ：台湾の産育習俗と『水子供養』（令和4年度国立民族学博物館共同研究会、2022年11月27日）。上記する研究発表を通して、報告者は異なる分野の研究者から意見を頂き、自身の研究内容を見直しする機会をもらった。それを踏まえて、博士論文の書籍化の作業も進んだ。2022年度において、単著、『「水子供養」の日台比較研究－死者救済儀礼の創造と再構築－』

（晃洋書房 2023年2月28日）の上梓は一つ重要な成果とも言える。

## (2) 日本と台湾における「プロライフ運動」の展開に関する考察

人工妊娠中絶（以下は「中絶」）をめぐる法律面ないし政治面の論争は、現代社会における一つ争点である。胎児の生命尊重を理由に、中絶に対して反対な意見を示すプロライフ派の主張は、アメリカ合衆国において、「宗教」が公共領域での働きを検討するする際の一つ重要な指標である。特にキリスト教のバックボーンを持つプロライフ団体の動きが着目されてきた。このような胎児の生命尊重運動、いかに日本と台湾に展開するか、また「宗教」がどのような役割を演じているのかに関しては、報告者が注目してきた課題である。

2022年度において、新型コロナウイルス感染症の緩和によって、台湾でのフィールドワーク調査が再開した。調査内容は二つの側面に大別することができた。一つは1970年から1980年にかけて、台湾のカトリック教会によって行われてきた優生保健法の反対運動への考察である。主に、国家図書館、台湾大学図書館などで所蔵する雑誌、新聞紙資料を通して、その手法を検討してきた。もう一つの側面は、2000年代以降から現在に至るまで、台湾のプロライフ団体の現状に関する調査である。主に3つのプロライフ団体に対するインタビュー調査を実施し、そしてデモ活動や儀礼に対する参与観察も行ってきた。

上記する調査を通して、異なる政治情勢で、台湾におけるプロライフ運動の流れと手法を把握することができた。研究成果の一部は、国際学会「宗教と越境する中絶論争：2000年代以降台湾におけるプロライフ運動の展開」（第6回アジア未来会議 2022年8月29日）での発表、及びアジア未来会議優秀論文集『アジアの未来へ：私の提案』にまとめた。

個人研究

現代日本における葬送儀礼と  
僧侶に関する研究  
— 一首都圏の事例を中心に —

研究代表者・東京分室 PD 研究員 磯部 美紀  
(社会学)

本研究は、現代日本の葬送儀礼（以下、葬儀と表記する）における僧侶の位置づけを宗教社会学的な観点から明らかにすることを目的とする。報告者は博士論文で、死や葬送に関する先行研究で使用される分析概念を用いて、僧侶・故人・遺族の全人格的な付き合いが残る地域における葬儀において、僧侶の果たしている役割を考察した。しかし、僧侶の役割は所与のものとして固定的にあるのではなく、状況に応じて変化する。また、「ひとり死」時代における葬儀（弔い）を検討するには、生者のみならず死者に着目することが重要である。そこで、次の2点を研究課題として設定し、2022年度は研究を進めた。課題1は、葬儀における僧侶の役割とその揺らぎを明らかにするとともに、葬儀における僧侶の位置づけを考察することである。課題2は、「ひとり死」に着目し、弔いにおける生者と死者の関係性を検討することである。以下では、それぞれの研究成果の概要を示す。

【課題1】葬儀における僧侶役割の現状と揺らぎ

新潟県・岐阜県における参与観察や聞き取り調査を通して、僧侶・葬祭業者・遺族から直接得たデータについて、型・記憶・社会秩序の3つの観点から分析すると、葬儀における僧侶の役割として、次の3つを示すことができる。第1に、僧侶は葬儀の「型」を体現し、死という危機的状況を乗り越えていくためのパターンを身体実践することで、遺族の情緒的な安心感や弔いの実感の獲得に寄与している。第2に、僧侶は小規模化する葬儀のなかで、法話を通して、遺族が各々に抱く「死者の記憶」を調整している。第3に、僧侶は死者を生者の世界から分離させるとともに、「故人なき生活」という新たな社会秩序を形成し、それを提示する役割を果たしている。

しかし、これら3つの僧侶の役割は、固定的なものとして見なすことはできない。僧侶や葬祭業者の語りからは、僧侶役割の揺らぎの兆候が明らかになった。かつては、地域の慣習であるから、儀式作法のやり方として正しいからといった理由で、葬儀に僧侶が「かわかることは自明視されてきた。しかし今や、僧侶が体現する葬儀の「型」の正当性そのものに対する懐疑

が広がっている。僧侶役割の一端が揺らぐなかで、僧侶はもはや、葬儀の「型」を演じる、すなわち厳かに儀式を執り行うだけで良いのかと疑問視されている。このように、僧侶の役割は所与のものとしてあるのではなく、状況に応じて変化しているのである。

では、こうした状況下で、葬儀に僧侶がかかわる意味はどのような点に見出されるのか。これを検討するために、僧侶の持つ2つの顔に注目した。僧侶・葬祭業者・遺族への聞き取りからは、僧侶が宗教的職能者としての顔と生身の人間としての顔を併せ持った存在であることが明らかになった。また、僧侶の語りからは、時として宗教的職能者としての顔と生身の人間としての顔の間で、葛藤していることが示された。僧侶の2つの顔という着眼点を手掛かりにすることで、寺檀関係を前提にしない首都圏の葬儀に僧侶がかかわる意味を考察する視点もたらされると考えられる。以上の研究成果は、『宗教と社会』29（「宗教と社会」学会）に掲載されている。

【課題2】弔いにおける死者と生者の関係性

「ひとり死」が各国で社会問題化していく中で、しばしば「弔う側の生者」と「弔われる側の死者」という関係を固定的なもののみならず議論が開始されることを疑問視し、「ひとり死」を扱った映画「おみおくりの作法」を題材に、パースペクティブ論とアフェクト論を参照することで、弔いにおける死者と生者のかかわりを検討した。明らかになったことは第1に、死者は多様体として存在することである。死者という単一的な所与の存在があるのではなしに、関係性に応じて死者は多様な世界として展開される。第2に、弔いにおける死者は、単に客体としてのみ位置づけられるのではなしに、生者の現在に影響を与え、生者を突き動かす存在と見ることも可能である。つまり、弔いにおける死者と生者の関係は、客体と主体として固定化されているのではなく、主体から客体へ、客体から主体（に準ずるもの）への往復運動の中で捉え直すことができる。以上の研究成果は、『哲学論集』69号（大谷大学哲学会）で報告している。

今後は、首都圏を中心に僧侶・葬祭業者などへの聞き取り調査を進めることで葬儀の実態を把握し、そこで得られたデータを課題1・2の結果とつぎあわせて考察していく。



## 個人研究

中国仏教における不退転の  
概念内容の解明研究代表者・東京分室 PD 研究員 澤崎 瑞央  
(仏教学)

本研究は、大乘仏教において、仏と成る道程から退くことがない段階とされる「不退転」に焦点を当て、その思想的根拠を含めた概念内容の解明を目的としている。

仏教における理想的人間像といえば「仏」その人を指すが、大乘経典ではそのような仏に成ることが確定した行者を「正定聚」や「不退転」という語句で示してきた。特に「般若経典」では、仏に成ろうと志す者を「菩薩」と呼び、さらに、本当の菩薩を不退転の菩薩と明示する。このことから、不退転とは、仏教徒の目指す一種の理想的人間像だと考えられる。

しかし、このような不退転の段階がなぜ求められたのか、また、どのような思想的根拠の基に構築されているのかについては研究の余地を残している。この語句が総じて十分な説明がなされずに用いられることや、様々な語句と関連して示されることに加えて、一見すると現実には到達不可能な段階と考えられるためである。そこで、本研究では、「般若経典」に関する最古の注釈書であり、東アジア仏教に多大な影響を与えた『大智度論』を対象として、「不退転」の概念内容を体系的に解明することを試みている。

これまでの研究では、見仏の三昧である「般舟三昧」、成仏の予言である「授記」、そして法の無生という智慧を備える「無生法忍」などと不退転の思想的関係を考察してきた。これらの研究成果から、『大智度論』に示される不退転とは「真の仏説とは何か」という課題が解決された状態と仮定される。本当の仏および仏説とは何か、という仏教徒の根幹にかかわる問題の解決が、いかなる外的内的影響にも左右されなくなることに緊密に関連していると考えられるためである。

上記の仮定を基に、今年度の研究では、以下の三点を検証考察したことを報告する。①「不退転に求められる方便」、②「正定聚と不退転と大乘正定之聚の語句の違いとその思想的展開」、③『大智度論』の不退転解釈の中国における受容と展開である。

まず①では、『大智度論』において、不退転の根拠の一つとして示される「方便」に着目した。方便も不退転と同様に多義語であるが、その用例のひとつとして、真理を「ことば」として現しだす方法、能力とい

う一面がある。この「ことば」としての方便に着目し、不退転に求められる方便の内実を考察した。『大智度論』では、行者は仏が教説を方便という形式で説いていることを把握し、さらに、その仏の方便（ことば）を受容する力（方便力）をもつことによって不退転とみなされる。このことから、仏から行者に対する「ことば」を用いた伝達形態の問題の克服が不退転の段階に求められている方便ということができる。さらに、このような方便力を備えた行者は、仏の「ことば」を真実であると信受することを通じて、仏の智慧を他の衆生に表象する位置づけにあり、仏の「ことば」の伝達者として機能する。常に仏の「ことば」を保持し衆生に表象することから、仏と成る過程から不退転とされるのである。

次に②では、中国における「正定聚」と「不退転」の用例を念頭に置き、曇鸞の『無量壽經優婆塞徒舎摩生備註』における「大乘正定之聚」の語句に着目した。この語句はこの文献に初出のものと考えられており、類似する語句から思想的に展開したものと考えられる。その背景には『大智度論』の不退転解釈が大きな影響を与えていると仮定されたことから、『大智度論』の解釈を基にして「正定聚」と「不退転」と「大乘正定之聚」の語句がどのような点で相違しているかを検討した。検討の結果、仏教思想の展開において、「正定聚」の意味に変遷がみられること、曇鸞が用いた「大乘正定之聚」の語句が『大智度論』の不退転解釈を前提にしている可能性が高いことを明らかにした。

最後の③では、中国仏教における不退思想の受容形態を解明するために、中国諸師における不退転解釈を概観した。検討した文献は、鳩摩羅什と廬山慧遠による『大乘大義章』、浄影寺慧遠の『大乘義章』、吉蔵の『法華義疏』等、智顛の『妙法蓮華経文句』等、迦才の『浄土論』、基の『妙法蓮華経玄賛』等である。検討の結果、『大智度論』の不退転解釈の受容の形態は一樣ではないことが明らかになった。さらに、不退説としては、a アビダルマを重視したもの、b 五十二位などの行位説との会通を図ったもの、c 不退説の異なりから教相判釈に用いられたものがみられた。

①は『真宗総合研究所紀要』40巻に、②は真宗教学大会に、③は東アジア仏教研究会にそれぞれ投稿・発表している。

## 歎異抄ワークショップ開催・参加報告(2022.10.1~2023.3.31)

### 第10回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加

国際仏教研究(英米班) 研究員 マイケル・コンウェイ

第10回『歎異抄』翻訳研究ワークショップは、2023年3月10日から12日までカリフォルニア大学バークレー校の主催によってバークレー市内の浄土真宗センターにて開催された。報告者は、本学の大学院生2名とアマ・ミチヒロ研究員とともに3月9日から13日までカリフォルニア州バークレー市まで出張し、参加者と共同して、翻訳作業に取り組んだ。

今回のワークショップは2017年度から始まった共同研究プロジェクトの一環として行われた。カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所と龍谷大学世界仏教文化研究センターと本研究所の間で三者学術交流協定を結び、そのプロジェクトに取り組んでいる。

ワークショップでは、三つの作業部会で翻訳作業が行われたが、報告者は、深励師の『歎異抄講林記』の作業部会の統括をした。3日間は、『歎異抄講林記』における『歎異抄』の第13条の注釈部分について、予め準備した下訳を検討した。

嵩満也先生が担当している寿国師の『歎異抄可笑記』の作業部会は、第12条の翻訳作業を一旦、保留し、第13条の英訳を作り始めた。第13条の訳はほぼ完成している。

マーク・ブラム先生が担当している円智師の『歎異抄私記』の翻訳作業は順調に進み、『歎異抄』第12条に対する注釈が完成し、第13条の英訳に進んでいるが、まだ完成していない。

3月10日(金)の午後に、アマ・ミチヒロ研究員は、“*Tannishō and Narrativity: Tannishō in the Light of Monogatari and Setsuwa*”という題で研究発表を行い、活発な質疑応答が行われた。

3月12日(日)の16時半から、全体会が行われ、今回のワークショップの作業を通して明らかになった課題や今後、考えるべき問題点を共有することができた。

今回のワークショップでは、第9回より参加人数が全体的に増え、龍谷大学からの大学院生は4名になったので、各部会では充実した内容の議論が進められた。各部会で翻訳しているテキストの長さバラつきがあり、進み具合が均一になっていないが、前回よりは近

づいており、今後、解消されると考えられる。

本プロジェクトにおいて翻訳研究ワークショップを開催している目的の一つは、次世代の研究者の育成である。そこで、本学の大学院生を対象に学内で公募を行い、旅費の補助をする学生を選定している。今回は、Woo Jongin(国際仏教研究研究補助員・博士後期課程仏教学専攻第二学年)氏と竹原仰(修士課程真宗学専攻第一学年)氏が補助の対象者として選ばれた。二人が提出した参加報告書を以下に転載する。

Woo Jongin氏の報告は、以下の通りである。

2023年3月9日から14日まで米国のバークレー市で開かれた歎異抄ワークショップに行ってきた。私は韓国人で、仏教学を専攻する学生なので日本固有の真宗学については不慣れであったが、以前から仏教経典を英語に翻訳することに関心を持っていたため、今回のワークショップに参加した。漢文という古代言語を現代語に翻訳することは仏教伝道において最も重要なことだと考える。ワークショップはカリフォルニア大学バークレー校の近くにある浄土真宗センター(Jodo Shinshu Center)で行われた。浄土真宗センターのスタッフたちはとても親切で愉快で、部屋もとても落ち着いてきれいだった。

ワークショップ初日、大谷大学、龍谷大学、カリフォルニア大学の教授と学生が参加し、3つのクラスに分かれ、それぞれ担当する原文を翻訳していった。該当する『歎異抄』の注釈書を日本語で読み上げた後、どのように英語に翻訳するかについてのディスカッションが行われた。翻訳作業は思ったより簡単ではなかった。単に日本語と英語との1対1翻訳ではなく、英語圏話者の立場でどのように受け入れられるのかを考え、適切な単語を選択しなければならなかった。例えば、「信心」という用語を単純に“faith”に訳すと、親鸞の意図を具体的かつ正確に伝えることができないからだ。また、「悪」という用語をどのように翻訳するかについて議論が行われた。東アジアの仏教圏に属する仏教信者は、「悪」という概念を絶対的悪ではなく、「善」と相対的な概念として理解することに慣れているが、キリスト教文化に慣れている西欧の人々は、

「悪」と「善」を絶対的に対立する概念と理解するため、親鸞における「悪」の概念を単に“evil”に翻訳すると、彼の思想に対する誤解を招きやすい。これらの翻訳語に関する討論の中で、実際にアメリカ人が考える善と悪、そして信心に対する率直な考えを聞くことができた。これらの時間は非常に貴重な経験であり、翻訳者にとっては良い刺激となった。

また、ワークショップが終わった後には、アメリカ仏教のトレンドについても聞く機会があった。米国人が仏教に対する関心がますます高まっていること、特に大学でも仏教学の授業を受ける学生が多いということだ。そして、大きな中古書店では仏教学コーナーが別に設置されているほど英語で書かれた仏教書が多いということだ。西欧人の仏教への関心が高まるこの時期に、このような仏教英語翻訳ワークショップが開催されることは非常に価値のあることだ。私は、今後も機会があればまたぜひ参加したい。

竹原仰氏の報告は、以下の通りである。

今回初めてパークレーにて、『歎異抄』ワークショップに参加した。以前大谷大学で開催された際も参加したが、現地での英語を中心とした翻訳活動は、日本で言うのとは、ネイティブの割合も高くとても刺激になる時間となった。

日本からの学生の参加者は、大谷大学大学院から二人、龍谷大学大学院から四人の計六人参加し、龍谷大学の学生の方々との交流も有意義な時間であった。

ワークショップは、日本で行われたものから引き続き、三日間、朝から夕方まで深励、寿国、円智の三班に分かれ、主に第十二章、第十三章の講録の翻訳を進めた。

班によっては、先生に事前に叩き台の英訳を作った上で、議論することもあれば、一から訳を作っていく班もあったが、どの班に参加しても一つ一つの英単語がどのようなニュアンスを持ち、読む側が何をイメージするか丁寧に考える場であった。

この報告書では、このワークショップに参加して、私自身が感じたことを中心に書きたいと思う。

このワークショップにて感じたことは大きく三つである。

一つは、より真宗学を学び、『歎異抄』を読む必要があるということである。『歎異抄』は真宗学を学び、親鸞の教えを聞く上では、とても重要なものと考えてはいたが、英訳を通して全く読むことができていないと実感した。特に今回のワークショップにおける第十三章の「本願ほこり」については、三者の講録ですら受け止めが異なり、またそれが『歎異抄』本文の内容を正しく言い当てているのか考える必要があった。親

鸞、また唯円が何を私たちに伝えようとしているのか、そしてその文章をこの三者だけでなく、多くの先達はどう受けとめていたのかを学び、自分自身もまた受けとめていくという、膨大な背景とプロセスを通して一つ一つの英単語を当てなければならぬと、日々の勉強量、私自身のお聖教を読む時間の姿勢を反省させられた。

二つ目は、その上で、英訳にする、議論していく英語力である。やはりどうしても英訳するとすると親鸞の思想を理解するという方向に行ってしまう。私自身もそうであった。しかし、その面ももちろん重要であるが、『歎異抄』が何を私に伝えようとしているか考えることが一番重要であろう。しかし、自分の日々の学びで感じたことを議論の中で英語にできない、はたまた、それをアカデミックの場でまた英語で表現していくことは大変難しいことであるように感じる。単なる聞法における実感の共有では、翻訳は進まない。しかしそれがなければ、ただの翻訳作業となってしまう。このことを議論の中で中心となって話すことができる英語力を身につけて行かなければならぬと痛感した。

三つ目は、遠く日本を離れた土地で、龍谷大学の大学院生と交流できたことである。何より龍谷大学の方々の勉強量、教養の深さには驚いた。真宗学科でありながら、基本的な古文漢文の知識はもちろん、英語や歴史様々な分野に通じた上で真宗を学んでいた。また自分とは違う視点での勉強の仕方もあり、幅広く真宗学の深さ、広さを感じた。

このように、今回のワークショップでは、多くの刺激を受け、自分自身の学びの姿勢を改められる時間となった。多くの視点を持ちつつ、しかし、大谷大学で学ばせて頂くような、お聖教のお言葉一つ一つを自分の上で聞いていくことを忘れず、英語も学び、言葉にしていくことができるように学んでいきたい。

## 公開シンポジウム報告 (2022.10.1～2023.3.31)

### 公開シンポジウム「宗教と多文化共生 —『在日コリアンの宗教』の現在—」

元東京分室 PD 研究員 萩 翔一

2022年11月26日、東京分室が進める共同研究の一環として、公開シンポジウム「宗教と多文化共生—『在日コリアンの宗教』の現在—」を、大谷大学およびオンライン (Zoom) のハイブリッド方式で開催した。

在日外国人が急増する一方、ヘイトスピーチ・ヘイトクライムが頻発する現代日本において、多文化共生の取り組みが急務となっている。これまで行政や市民団体の取り組みはしばしば注目されてきたが、宗教者や宗教団体による取り組みは主題化されているとはいえない。そこで本シンポジウムでは、宗教、特にかつて在日コリアン (特に一世) が中心だった宗教が、現在いかなる取り組みを行っているのかに注目した。

朝鮮半島から日本に渡ってきた一世たちは、儒教式の祖先祭祀 (チェサ) や巫俗儀礼 (クッ)、キリスト教などに関わってきた。そこでは時代経過とともに世代交代が生じ、ホスト社会に適合的な儀礼や組織運営が行われるようになったり、日本人や韓国本国からニューカマーが参与したりするようになった。その結果、当初有していた社会的機能、すなわち在日コリアン (特に一世) のためのエスニック・コミュニティとして機能していると自明視できない現状がみられるようになった。なかには、後述するように、子ども食堂の実施やムスリムへの土葬墓地の提供など、「多文化共生」とみなされるような社会活動を展開している教会や寺院が存在する。

本シンポジウムでは、かつて「在日コリアンの宗教」として機能していたものがいかなる変化を遂げたのか、そして上述したような社会活動がいかなる経緯で始まり、どのような理念でなされているのか報告する。それを通して、「多文化共生」の取り組みにおける (在日コリアンが関わる) 宗教の固有の役割やその特徴を検討することを試みた。

報告者と報告タイトルは以下の通りである。萩翔一 (東京分室 PD 研究員) 「在日コリアンと宗教をめぐる研究動向の整理」、中西尋子氏 (関西大学非常勤講師

／大阪公立大学都市文化研究センター研究員) 「韓国系のプロテスタント教会における子ども食堂の活動」、宮下良子氏 (東洋大学アジア文化研究所客員研究員／大阪公立大学都市科学・防災研究センター特別研究員) 「在日コリアン社会における仏教と巫俗のタイポロジー—多文化共生に向けて—」、吉田全宏氏 (大阪公立大学都市文化研究センター研究員) 「日本における韓国仏教と多文化共生」。四氏の報告の後、谷富夫氏 (大阪市立大学名誉教授／前甲南大学文学部教授) よりコメントおよび質問がなされ、さらに参加者を交えた質疑応答がなされた。また、報告の司会は澤崎瑞央氏 (東京分室 PD 研究員)、質疑の司会は萩が担当した。

萩は、在日コリアンと宗教をめぐる研究が、近年特に蓄積がなされているものの、その動向は整理されていないことを踏まえ、当該研究領域の先行研究を整理し、「宗教と多文化共生」というテーマとの関わりを論じた。まず2019年までに刊行された在日コリアンと宗教の関係を主題とした日本語の学術論文・学術書 (総数: 152) を対象に80年代以降、徐々に研究の蓄積がなされており、特に2010年代に急増していることなどを概説した。また主要な研究動向に触れたのち、その成果として、在日コリアンが関与する多様な宗教 (儀礼) の実態とその社会的機能を実証的に解明しており、近年は、宗教者・信者の文化的背景の多様化が論じられるようになっていく点を指摘した。そのうえで今後の課題として、近年の研究は、宗教間比較の視点が弱く、また多文化共生の議論との接続がほとんど図られていないことから、在日コリアンが関与する各宗教の組織内外における「多文化共生」の取り組みをテーマとした共同研究を実施することが有益である旨を報告した。

中西氏は、韓国系のプロテスタント教会である在日大韓基督教会における子ども食堂の活動について報告した。在日大韓基督教会は、日本が朝鮮半島を植民地支配した時代に韓国キリスト教の日本宣教により形成

された教団である。日本全国に94の教会・伝道所があり、信者は6,267名（『宗教年鑑』平成30年版）である。教団が形成された歴史的経緯から1970～1980年代には在日韓国・朝鮮人の人権獲得運動に積極的に取り組んでいる。在日大韓基督教会はエスニック・コミュニティの「民族の教会」という性格をもつが、近年は「子ども食堂」の活動を行う教会が現れていることに特徴がみられる。今回の報告で事例としたのは、東九条子ども食堂（京都南部教会）、西院ふれあい食堂（京都教会）、ぬくもり子ども食堂（品川教会）である。子ども食堂の運営には、日本人でクリスチャンではない大学生や地域のボランティアが関わり、利用者も地域の日本人であった。このような活動実態の調査によって、在日大韓基督教会における子ども食堂の活動が教会が宗教や民族の枠を越えて日本社会に根付いていることが指摘された。

宮下氏の報告では、在日コリアン社会において、古代朝鮮シャーマニズムと仏教が習合した特異な宗教的観念・儀礼が展開されるようになり、その独自な実践の場を指示する呼称として従来「朝鮮寺」が用いられてきたことが指摘された。これらの「朝鮮寺」は、スニム（僧侶）やポサル（菩薩＝女性のシャーマン）、そして、それを支えた在日一世の女性信者たちによって形成されてきたものである。しかし、宮下氏は、近年における関西の大都市圏近郊の生駒山地の「山の寺」と大阪市内の「街の寺」の間に見られるネットワーク化について論じ、「朝鮮寺」を「在日コリアン寺院」と改称した。そのうえで、戦前の在日コリアン一世によって形成されてきた「朝鮮寺」から、現在の「在日コリアン寺院」への移行過程で、在日コリアンとその周辺で展開されてきた宗教的実践が明らかにされた。そして、彼ら／彼女らの日常生活に根差した宗教的実践の変容が、今日の日本社会における多文化状況の中で持つ意味が考察された。

吉田氏の報告では、韓国仏教を志向する寺院の中でも「本山一末寺」関係を結んだ主要寺院（普賢寺・高麗寺）および関連団体の活動に着目し、多文化共生の可能性が示された。在阪コリアンの多くは済州島出身であるが、渡航時期により日本での在留資格に違いがあり、初期の渡航者は社会関係が著しく制限された。普賢寺は幅広い社会活動を通して、そうした人々の制限された社会関係を補完する役割を担ってきた。また、高麗寺ではムスリムへの土葬墓地の提供という新たな試みが始まっている。関連団体は、食事会や文化講演活動を通じて、在日コリアン（高齢者）のみならず、ニューカマー外国人や日本人も交流できる結節的活動を展開してきた。以上のように、韓国仏教の社会活動

は民族の枠を越えて拡がりつつあり、これらの活動はオールドカマーからニューカマーへの架け橋として、多文化共生活動の新たな一歩として捉えられることが指摘された。

四氏の報告に対して、谷氏は「三つの公共領域（家族、親族、地域社会）と三つの社会的欲求（現世利益、親族結合、社会変化）が三つの宗教（朝鮮寺、チェサ、キリスト教）の分業関係で全てカバーされていく」と、全体像を提示した。谷氏は1982年から「宗教社会学の会」の生駒調査に参加したことがあり、大谷大学の教員を務めた飯田剛史氏との共同調査に関するエピソード、及び自身の研究を振り返った。また黎明期の研究と比較しながら、本シンポジウムのサブタイトルでもある「在日コリアンの宗教の現在」を考える際に、(1)かつて注目されてこなかった在日の仏教に関心が持たれている、(2)ニューカマーの出現によって「多文化共生」のテーマが浮上している、(3)宗教組織外部への社会活動を通して「差別する日本人と差別される在日」という枠組みが揺らぎ出している、という三つの特徴を指摘した。全体的なコメントの後、谷氏もまた発表者それぞれに質問し、議論を深めた。そのほか、参加者から、寺院の運営形態、ムスリム墓地の問題をめぐる宗教者の関与、クライアントが求める救いのあり方など、それぞれの報告者に対して質問やコメントを頂いた。



## 公開研究会・講演会報告（2022.10.1～2023.3.31）

### 東方仏教徒協会公開講演会（Lucia Dolce 先生） 開催報告

国際仏教研究（英米班）研究員 マイケル・コンウェイ

2022年度から東方仏教徒協会の新しい活動として、定期的に講師を招いてオンラインで配信する講演会を実施することにした。協会の活動を広く知ってもらうことと共に、*The Eastern Buddhist* 誌の紙面を充実させることが開催の主な目的である。2022年12月6日の18時から2022年度の第二回の公開講演会を開催した。

今回の講師として、中世日本の密教の研究を続けてこられた Lucia Dolce 先生（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院教授）を招聘し、“What Is Japanese Medieval Buddhism?: New Perspectives from Tantric Ritual Material”（中世日本の仏教とは何か：タントラ儀礼の資料が与える視点から）という題の元で講演をしていただいた。Dolce 先生は、日蓮の研究を皮切りに、中世日本の密教のあり方について様々な研究を進めてきている。氏は、日蓮の著作における密教的要素について丹念に調べ、その背景について種々に調べてきている。その研究成果は、西洋の学界における日本仏教の捉え方に大きな影響を及ぼしており、日蓮の思想の鮮やかな把握に大きく貢献している。また、近年では、氏は、密教文献において、胎児の発達過程がいかに描かれているのかということ、そしてその言説が密教文献の中でいかなる役割を果たしているのかということについて、いくつもの論文を発表している。

今回の講演の内容は、その研究の延長線上にある。氏が、近年の寺院調査において発掘した資料をいくつか紹介し、その内容から見えてくる中世の密教の実践と教学について報告した。氏が紹介した資料は、密教の儀礼の実践法を詳細に記した聖教類で、その多くが、言葉だけではなく、図像も含まれており、儀礼の内容を鮮明に把握できるものが多かった。それに加えて、多くの資料に記されている解説の部分において、その教学的意味合いが詳細に説かれているため、儀礼の内容が、儀礼を行っていたものによって、どのように捉えられていたかということが読み取れる形になっている。これらの資料に基づいて、氏はこの種の聖教類が、

中世の仏教の実践と教義を把握するためにいかに大きな役割を果たし得るかということを示した。

また、氏は胎児の発達過程を示す一つの資料を取り上げて、智慧が獲得されるプロセスを譬喩的に描写しているものであるということ指摘した。その上で、胎児の発達過程の第一歩としての受精の描写を図像学的に分析し、他の聖教類に同様の形の図像が多く見受けられるということ指摘し、中世の密教における菩提心の発得ということが、受精として度々、譬えられていることを指摘した。

氏の講演の題目は、非常に斬新な発見を提示することを思わせるものであったが、講演そのものは、新たな研究地平を開くものでもなく、地道な資料の収集と読解が中世の仏教者の実践内容に光を当てるという平凡なものであった。しかし、最新の欧米における日本の仏教研究の中において、従来の文献学的方法論が依然として踏襲され、採用されているということを見て、安心したところがある。

会場には、国際仏教研究の研究員と東方仏教徒協会の編集責任者に加えて、本学の大学院生が数名、参加した。またオンラインの参加者は、欧州とアジアを中心に20名を超えていた。時差の関係で、北米にいる者が参加できない時間設定になっていたため、なるべく多くの人に参加できるように、今後の開催時間について検討をする必要があると考えられる。



Lucia Dolce 先生

# 公開研究会「胎児の『人格』とスピリチュアリティ」 開催報告

東京分室 PD 研究員 陳 宣肆

東京分室の共同研究は「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究」という問いから出発し、2022年度は「現代社会における宗教と共生」というテーマで展開している。本研究会は共同研究の一環として、橋迫瑞穂氏（大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター（UCRC）研究員、立教大学社会学部ほか兼任講師）を報告者として招聘した。

橋迫瑞穂氏は女性のスピリチュアリティに関する研究に取り組んできた社会学者である。著書『妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティ』（2021年、集英社）においては、組織的宗教や女性の自己決定権を強調するフェミニズム運動からはみ出した妊娠・出産をめぐる言説に着目し、スピリチュアリティとの関わりのある様子を検討している。

公開研究会は2023年2月13日（月）にZoomによるオンライン形式で開催し、参加者は総計45名である。オンライン形式のため、遠隔地の方も多く参加することができた。橋迫氏の報告のタイトルは「胎児の『人格』とスピリチュアリティ」であり、その概要は以下の通りとなる。

1980年代から日本社会に広まった妊娠・出産をめぐるスピリチュアル・コンテンツは、女性だけでなく胎児についても言及してきた。本報告は、「胎教」や「胎内記憶」といったスピリチュアル・コンテンツにおける胎児のイメージに注目して、その内実を検討した。胎児は「胎教」や「胎内記憶」といったスピリチュアル・コンテンツにおいて、いわば聖体示現のように聖性をまとった存在としてか、あるいは人格を持つ「他者」としてイメージされてきた。こうした胎児のイメージによって、妊娠・出産という極めて私的な体験が聖性を付与される一方で、聖性を帯びた「母性」を身に着ける体験として妊娠・出産が意味づけされることでジェンダー規範との葛藤をもたらしてきたことも指摘される。また、1990年代に出版された「胎教」についての書籍では、男性によって発信されてきたものが主流であるためか、母体に対する外部からの侵襲としての性格を有していたり、家父長的な家族観も見いだされる。だが、2000年代に注目されるようになった「胎内記憶」では、胎児が母となる女性を肯定す

る関係に置かれることで、パートナーとしての男性が背景に置かれるようになったことも見受けられる。

報告の後、参加者側から多様な質問が寄せられた。「胎内記憶」「胎教」といった出産をめぐる言説が医療のイデオロギーと親和性が高い原因のはなぜか、日本の無痛分娩の割合が低いのはなぜか、といった質問を通して、参加者の方が日本の産科医療の状況に関心を持つことが分かった。それを踏まえて議論が深まり、戦後日本の医療における「助産師」「産婦人科」の特殊な位置付け、出産の痛みを重視するイデオロギーなどについても議論された。そして、質問のみならず、参加者側から自身が調査者として寺社で行った子授け祈願の観察経験のほか、自身の出産経験をめぐる感想が寄せられた。それを通して、宗教のツーリズムの側面、不妊治療とスピリチュアリティとの関わりなど、消費社会における宗教のあり方についてのことも議論され、話題がさらに展開された。

本研究会を通して、一見「無宗教」とおぼしき日本社会における宗教性を再認識することができた。妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティは、今後どのように変化していくかはさらに注目すべき問題である。



参加者の質問に回答する講師、橋迫瑞穂氏

## 東方仏教徒協会公開講演会（James C. Dobbins 先生） 開催報告

国際仏教研究・研究代表者 井上尚実

オンライン Zoom 配信される形になった東方仏教徒協会公開講演会の第3回は、ジェームズ C. ドビズ先生（オーバーリン大学名誉教授）を本学マルチメディア演習室にお迎えして2023年2月22日（水）の夕方に開催された。“The Many Faces of D. T. Suzuki” 「鈴木大拙の多面性」という講題のもと、ちょうどドビズ先生による最新の大拙伝研究 “D. T. Suzuki: A Brief Account of His Life” 〈<http://doi.org/10.15070/00011348>〉が *The Eastern Buddhist*, Third Series, Vol. 2, No. 2 (2022) の巻頭に掲載されたばかりのところで実現したタイムリーな講演会であった。

ドビズ先生は、英語圏における浄土真宗研究を長年にわたりリードしてきた国際的な仏教研究者であり、その代表的著作 *Jōdo Shinshū: Shin Buddhism in Medieval Japan* (Indiana University Press, 1989; Reprint University of Hawaii Press, 2002) に加えて、恵信尼消息の研究 *Letters Of the Nun Eshinni: Images of Pure Land Buddhism in Medieval Japan* (University of Hawaii Press, 2004) など多くの著作によって学界に貢献されている。2009年から2011年までの3年間、客員教授として大谷大学大学院特別セミナー「宗教学的アプローチによる真宗研究」も御担当くださっている。

その後カリフォルニア大学出版から発刊された鈴木大拙の英文著作集では、浄土教に関する著作をまとめた巻 (*Selected Works of D. T. Suzuki: Pure Land*, University of California Press, 2015) の編集を担当され、その過程で大拙による浄土教関係の英文著作のすべてに目を通され、*The Eastern Buddhist Society* と *The Eastern Buddhist* 誌が果たしてきた役割の重要性についても明らかにしてくださっている。

今回の講演では、ドビズ先生御自身が仏教研究の道に進まれたきっかけにも D. T. Suzuki による英文著作の影響があったことをお話くださった。大学の学部 (Rhodes College) では西洋哲学を専攻し、1971年の卒業後1年間日本で英会話を教えていたときに “Oriental Philosophy” 「東洋の哲学」に興味を抱き、それを学ぼうとスリランカの University of Peradeniya 哲学修士プログラムに応募。その準備と

して1972年に初めて *Zen and Japanese Culture* (1938)、*Field of Zen* (1969) など大拙による Zen に関する英文仏教書を購入して読み、スリランカに行っても引き続き *Studies in the Lankavatāra Sūtra* (1930)、*An Introduction to Zen Buddhism* (1949) などに目を通され、ペラデニア大学の図書館に入っていた *The Eastern Buddhist* 所載の論文も読まれたとのこと。英語で仏教の「真実」を語る東洋の「正統な権威」として、D. T. Suzuki を通して仏教を学び始めたそうである。このようなエピソードは、現代アメリカの大学で教鞭を執る年輩の仏教学者の多くに共通してみられる。

ドビズ先生は今回の講演を通して、大拙没後半世紀を過ぎて公開された手紙や日記などの資料に基づく歴史的な研究によりながら、新たに光があたってきた大拙像を中心に紹介してくださった。特に、これまで十分に知られていなかったピアトリス夫人から大拙への影響の大きさについて、興味深い分析を提示してくださった。この講演の Zoom 録画データは EBS ウェブサイトの LECTURE のページからオンラインで視聴できる。〈<https://ebs.otani.ac.jp/pg1424.html>〉また、この講演の内容については、改めてドビズ先生から *The Eastern Buddhist* 誌にご寄稿いただく予定である。



James C. Dobbins 先生



## 東京分室 PD 研究成果報告（2023.3.2）

東京分室長 福島 栄寿

元東京分室 PD 研究員 萩 翔一

東京分室 PD 研究員 陳 宣聿・磯部 美紀・澤崎 瑞央

2023年3月2日（木）に、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、「真宗総合研究所東京分室PD研究員研究報告会」が大谷大学響流館3階マルチメディア演習室で開催された。開催の目的は、各PD研究員の活動の認知および意見交換である。報告者（開催時、いずれも東京分室PD研究員）と報告タイトルを報告順に示すと、以下の通りになる。①磯部美紀「現代日本の葬儀における僧侶恩役割と揺らぎ」、②澤崎瑞央「『大智度論』における不退転の概念内容の解明」、③陳宣聿「台湾における胎児生命尊重運動の展開」、④萩翔一「在日コリアンのキリスト教信仰の持続と変容—世代交代とニューカマーの到来に注目して—」。各研究員が個人研究の成果を報告した後、質疑応答を行った。それぞれの報告概要は以下の通りである。

①磯部研究員は、2022年度の研究成果として、(a)葬儀における僧侶役割の現状と揺らぎ、(b)弔いにおける死者と生者の関係性の捉え直しの2点を報告した。

(a)に関しては、新潟・岐阜の事例を、型・記憶・社会秩序の3つの観点から分析すると、葬儀における僧侶は、葬儀の「型」を体現することで遺族の情緒的な安心感や弔いの実感の獲得に寄与し、小規模化する葬儀のなかで遺族が各々に抱く「死者の記憶」の調整役を果たし、「死者と生者」として関係性を再構築するための新たな社会秩序観を遺族に提示する役割を果たしていることが示せる。しかし、これら3つの僧侶役割は固定的なものとして見なすことはできない。僧侶や葬祭業者の語りからは、僧侶役割の揺らぎの兆候が明らかになった。僧侶はもはや、葬儀の「型」を演じる、すなわち厳かに儀式を執り行うだけの存在で良いのかと批判的なまなざしが注がれている。

(b)に関しては、「ひとり死」が各国で社会問題化していく中で、「弔う側の生者」と「弔われる側の死者」という関係を固定的なもののみならず議論が開始されることを疑問視し、「ひとり死」を扱った映画『おみおくりの作法』を題材に、パースペクティヴ論とアフェクト論を参照することで、弔いにおける死者と生者のかかわりを検討した。明らかになったことは第1に、死者は多様体として存在することである。死者という

単一的な所与の存在があるのではなしに、関係性に依拠して死者は多様な世界として展開される。第2に、弔いにおける死者は、単に客体としてのみ位置づけられるのではなしに、生者の現在に影響を与え、生者を突き動かす存在と見ることも可能である。つまり、弔いにおける死者と生者の関係は、客体と主体として固定化されているのではなく、主体から客体へ、客体から主体への往復運動の中で捉え直すことができる。

②澤崎研究員は、今年度の研究成果として、大乘仏教における理想の人間像を明らかにすることを目的に、『大智度論』における不退転概念の体系的な解明に取り組んできたことを報告した。研究成果報告会では、今年度から東京分室に所属したことを踏まえ、研究目的ならびに方法、そして主な対象とする文献の最新の研究成果に重点を置き、研究を概観した。

まず「不退転」が大乘仏教における理想の人間像を示している可能性を指摘した後に、『大智度論』に関する最新の研究成果をまとめた。この文献は、インド語原典が無いことやその流布の状況から長らく仏教思想史上の位置付けが不明瞭であった。しかし、近年、この文献がインド文化圏に由来することに加え、「般若経典」の形成史にも影響を与える可能性が高いことが指摘されている。これらの研究成果を踏まえた上で、不退転とその関連語句に対して詳細な注釈を施している『大智度論』を対象にして、不退転の概念内容を解明する意義を論じた。

続いて、語句の用法の変遷から不退転や「正定聚」の意味内容が変化している点、中国仏教僧における不退転解釈が異なる点、そして『大智度論』における不退転と方便の関係について、それぞれ発表・論文を掲載したことを報告した。また、来年度の課題として、『大智度論』において「神通力」と「往生」の二つの語句がどのような点において不退転と関係しているかを体系的に分析することで、不退転という境地のもつその具体的内容を検討考察することをあげた。

③陳研究員は、台湾における胎児生命尊重運動の展開を検討し、特に2003年に結成された多宗教の団体「尊重生命全民運動大聯盟」の成立と発展を考察した。それを通して、2000年代以降、優生保健法の改訂運

動の際にメディアで広く取り上げた「宗教団体 vs 女性団体」の図式の形成、そして現在の状況について考察を試みた。

台湾において、刑法墮胎罪（1935年公表）が存在しながら、1985年の特別法、優生保健法の施行によって特定の状況で中絶が可能となる。1970年から1980年代前半にかけて、優生保健法の立法をきっかけに、台湾社会で中絶の是非が議論されるようになったが、1985年法律施行後、反対の声が沈静化した。しかし、2000年代初頭で中絶問題が再燃し始め、特に2003年、尊重生命大聯盟の成立が一つ指標的な出来事である。

尊重生命大聯盟は多宗教の連合である一方、中心で主導する人物はカトリックの神父である。彼は神学的な立場からカトリックにおける人間観、生殖観を強調する一方、「家庭の価値」を軸に多宗教の連合を狙い、台湾社会に胎児の生命尊重に呼びかけをした。特に2003年から2004年にかけて、ドキュメンタリー『侵食される理性』が教育現場での応用をめぐって、女性団体の対立が目立つようになった。

尊重生命大聯盟は、現在もお胎児の生命尊重派の代表格ではあるが、2010年代後半からやや下火になった。その代わりに、国内での多宗教の繋がりではなく、海外のプロライフ団体などとの繋がりを強調する団体も浮上した。特にキリスト教のネットワークを通して交流を図る側面が目立っている。上記する団体の動きは法律の改正というよりも、胎児の生命尊重のキャンペーン活動、純潔教育、妊娠葛藤へのサポートに力を注いでいる。現時点において、これらの団体が台湾社会での影響力はまだ大きいとは言えないが、今後の広がりを含めてその動向を注視する必要がある。

④萩研究員は、今年度の研究経過および成果として、在日コリアン（特に二世）のエスニシティに関わる問題とキリスト教の信仰が、当事者の中でどのように関連付けられて考えられてきたのか、という課題に取り組んだことを報告した。

まず、1950-70年代前半の在日大韓基督教会の青年会資料を収集・分析し、在日青年（二世）の議論の変遷を整理した。その結果、1960年代以降、一世が中心となる教会の体質を批判し、在日を取り巻く社会問題に目を向ける姿勢が一貫していることを確認した。こうした議論は、信仰とエスニシティを結合させた「在日キリスト者」のアイデンティティ構築であり、一世とは異なるかたちでその生き方を方向付けようとした試みとして捉えられることを論じた。

続いて、1980年代以降、在日コリアンが集う教会にニューカマーの韓国人が多く参与するなかで、在日

コリアン二世がどのような信仰生活を送っているのかに注目し、聞き取り調査を実施した。教会選択という信仰生活を送るうえで重要な契機にニューカマーに関わる事例、ニューカマーの信仰心と比較して自身のそれを位置づける事例、到来するニューカマーに対抗するような教会運営を志向する事例を紹介し、ニューカマーの存在が在日コリアンの信仰生活を分析するうえで無視できないことを指摘した。今後の課題として、個人のエスニック・アイデンティティの在りようを明らかにし、それがニューカマー（とその信仰スタイル）に対する評価といかにリンクしているのかを分析することで、信仰とエスニシティの結合（ないしは分離）の諸相を考察することをあげた。

以上のように、4名のPD研究員によって研究成果が報告された。初めての試みであったが、大谷大学学長、真宗総合研究所所長と主事をはじめとする教職員のほか、大学院生など20名を上回る多数の参加があり、活発な議論が展開された。また、真宗総合研究所東京分室の普段の活動を周知する機会となった。



発表の様子

## 国内研究調査報告 (2022.10.1~2023.3.31)

### 沖縄調査出張報告 (2022.11.5~2022.11.8)

東京分室長 福島 栄寿

元東京分室 PD 研究員 萩 翔一 (11月6日分執筆)

東京分室 PD 研究員 陳 宣聿(11月5日分執筆)・磯部 美紀(11月7日分執筆)・澤崎 瑞央(11月8日分執筆)

2022年11月5日(土)から8日(火)にかけて、福島栄寿(東京分室長)・萩翔一(元PD研究員)・陳宣聿(PD研究員)・澤崎瑞央(PD研究員)・磯部美紀(PD研究員)の5名が、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、沖縄における「共生」のあり方の実態を知るために現地調査を実施した。以下では、調査日ごとに調査概要を示していく。

11月5日(土)：初日、東京から那覇へ移動し、まずは泊外人墓地を見学した。泊外人墓地は泊港の北岸の近くに位置している墓地であり、以下は竹内康博の論考：竹内康博 2012「泊外人墓地の歴史とその将来」『墓地法の研究』成文堂：183-201、及び墓地内の説明、石碑を参照しながら、その概要をまとめていく。

墓地内の説明によると、最古の墓は1718年建てられた中国人の漂着民の墓碑である。欧米人のための墓の増加は、1853年から1854年にかけてペリー提督とその従者が来航以降のことである。第二次世界大戦以前、泊外人墓地では22基の墓が確認することができ、地元からは「ウランダー墓」(欧米異国人に対する通称)と称される。そして、第二次世界大戦以降、米軍による占領が始まり、泊外人墓地は亡くなった米軍人及びその親族のために利用されていた(竹内 2012)。

墓地内には戦後の再建の経緯を記した石碑があり、表裏それぞれ日本語と英語で以下の内容が記されていた“This cemetery was rebuilt on 30th June 1955 by the City of Naha with help given by the USCAR as it has been destroyed by the World War II”「今次大戦のため、この墓地も戦災を受け大破したので、米国民政府の援助により、那覇市これを再建 六月三十日」(句読点は報告者)。調査を通して、漂着民、宣教師、軍人など時代を跨いで沖縄に眠る「外国人」の多様性を観察できた。この結果をさらに他地域外国人墓地との総合的な比較調査を進めると、その特殊性も一層明らかにできると考える。

泊外人墓地を見学した後、次是那覇市に位置する波上宮と護国寺に向かい、護国寺の名誉住職・名護俊海



泊外人墓地

氏(74代目)に聞き取り調査を行った。現在、高野山真言宗に属する護国寺は、かつて波上宮の別当寺であった。護国寺の歴史は14世紀の察度王時代に遡れ、2018年に創建650年の記念式典が盛大に行われた。50年前の沖縄復帰(1972年)は護国寺にとっても重要な年であり、境内の建物もほぼこの時期に再建された。

話者の名護俊海氏は、護国寺の住職を30年間務めた経験のほかに、沖縄仏教会、沖縄宗教者の会においても重役を担っていた。彼の話を通して沖縄の仏教及び他(多)宗教の繋がりを少し概観したい。

寺檀関係が根付いていないことは沖縄仏教の重要な特徴である。信徒は個人として寺院の信者になり、家ご

との宗教としての意識が低いため、葬祭などの場面においても宗派へのこだわりが少ない。そして、信徒のみならず、寺院側においても多宗教・宗派の連合で行事を開催する傾向がある。多宗派連合は、沖縄仏教会が主催した花まつりにみられる。毎年4月に行われる花祭りは、沖縄仏教会の一大行事で、各寺院は会場を持ち回り、宗派を超えて共に釈迦の誕生を祝う。そして、多宗教のコラボレーションは沖縄宗教者の会にみられる。沖縄宗教者の会の歴史は30年近く、現在、会員は約14名で、カトリックの神父や新宗教の教会長、寺院の住職、神社の宮司などによって構成される。宗教が異なるものの、沖縄宗教者の会は定期的に交流を行い、会長を設けないことは友好な関係を保つことのできる要因だという。沖縄宗教者の会は毎年8月15日に「祈りと平和の集い」を開催し、戦没者を慰め、平和祈願をする。集いを主催する社寺・教会は毎年メンバーによって持ち回るため、「祈り」の方法も変動する。自身と異なる宗教の儀礼にも積極的に参加する姿勢がみられる。今後はさらに調査を深め、沖縄における宗教、宗派間の対話、協力と葛藤を把握する一つの切口になると考える。



護国寺

11月6日(日)：2日目にまず訪問したのは、佐喜眞美術館である。同美術館は普天間基地から一部返還された土地に1994年に開館されたものであり、屋上からは隣接する普天間基地が一望できる。また、敷地内には館長である佐喜眞道夫氏の先祖が眠る立派な亀甲墓も存在している。訪問当日は佐喜眞氏がいらなかったため、「沖縄戦の図」(丸木位里・俊氏作)が描かれた背景やそこに込められた想いを詳しく解説いただいた。次の予定が差し迫っていたため、残念ながら他の作品についてはじっくり拝見できなかったのが心残りである。

次いで訪れたのは、普天間基地から徒歩数分の場所に位置する普天間バプテスト教会(沖縄バプテスト連

盟所属)である。同教会の日曜礼拝に参加した後、昼食をはさんで午後から担任牧師の神谷武宏氏に聞き取り調査を行った。沖縄で生まれ育った神谷氏は「普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会」を2012年に立ち上げて以来、毎週月曜日に信徒らとともに活動している人物である。活動を立ち上げた経緯や教会の附属保育園に米軍ヘリの部品が落ちた事故とその後の対応、電話やメール、インターネット等での誹謗中傷に関する話を主にうかがった。



普天間バプテスト教会(沖縄バプテスト連盟)

最後に、佐敷教会(日本基督教団所属)を訪れ、担任牧師である金井創氏から話をうかがった。北海道出身の金井氏は、2006年に佐敷教会に赴任した。毎週、海上行動(船やカヌーで海上に出て、辺野古の海への土砂投入に抗議する活動)を行っていることから、米軍基地の辺野古移設の問題点とそれに反対する海上行動の取り組みを解説いただいた。

今回、沖縄調査を実施するにあたって、沖縄戦の歴史、普天間基地に起因する事件・事故や辺野古への移設問題の概要は、事前にある程度、学習していたつもりであった。しかし、それは表面的な理解に過ぎなかったことを思い知らされた。否応なく事件や事故に巻き込まれ、身近な人が被害に遭い、生活が脅かされる実態をうかがい、沖縄に生きる人々が経験する構造的な差別や暴力、理不尽さが初めて現実味を帯びて、眼

前に広がった気がした。

沖縄戦や米軍基地の問題は、本土に生きる我々にとって意識する機会がほとんどない。マジョリティはマジョリティであるがゆえに、マイノリティの置かれた状況について考えたり、意識したりしなくても生活に不便しないからである。その「特権」を自覚し、本土に生きる人間として、「沖縄の問題」ではなく、本土が沖縄に背負わされてきた問題（要するに「本土の問題」）として捉え、自分がそれにどう関わるのか、端的に言えば「我々の問題であり、だからこそ向き合う必要がある」ということによりやく気がついた一日であった。



佐敷教会（日本基督教団）

11月7日（月）：3日目は、沖縄における仏教寺院の現状や葬儀の実態に関する聞き取り調査を実施した。まずは、真宗大谷派東本願寺沖縄別院を訪問し、輪番・長谷暢氏と総代・照屋隆司氏を対象に聞き取り調査を行った。長谷氏からは、寺檀関係の根付いていない沖縄の地に東本願寺沖縄別院が設立された経緯や、梵鐘に刻まれた文字に込められた願い、そして沖縄における葬儀や墓の現状が明らかにされた。照屋氏からは、自身が真宗の教義に触れた経緯や、真宗教義の受容を通じた心境の変化が語られたほか、沖縄の祖先祭祀のあり方と真宗の教義との折り合いのつけ方が示唆された。



真宗大谷派東本願寺沖縄別院

次いで、浄土真宗本願寺派本願寺沖縄別院を訪れた。所長兼輪番の中岡順忍氏からは、沖縄における布教の特徴とその困難さが指摘された。中岡氏は、自らの他府県での布教・教化の経験と照らし合わせながら、沖縄における仏教の位置づけや先祖観について語った。沖縄では、本土のように門徒が手次寺を護持する感覚はなく、寺院側から人々に寄付を募ることもないという。人々が特定の寺院や宗派にこだわりを見せることは稀であり、「お坊さん」として一括りのものと見なされることが多いとする。そのため、葬儀と法事とは異なる寺院の僧侶が導師を務める場合も少なくないことが示された。

続いて、葬祭業者社員A氏の聞き取り調査を行った。A氏の語りからは、沖縄の葬儀の現状のほか、葬儀における僧侶の役割が明らかにされた。葬儀形式別の内訳は、家族葬が全体の6～7割、一般葬が約3割、火葬式が1割程度であるとされ、半数以上が家族葬で営まれている。また、繰り上げ初七日（葬式当日に初七日を合わせて行うこと）も一定数営まれるようになっており、沖縄の葬儀も小規模化とともに簡素化が進行していると言える。これは、全国的な傾向と符合する。寺檀関係の根付いていない沖縄においては、葬儀にかかわる僧侶を紹介する窓口として、葬祭業者が重要な役割を担っている。葬儀の導師を務める僧侶の選択にあたっては、人々が特定の宗派にこだわる様子は見受けられず、葬祭業者の裁量に任せる人がほとんどという。A氏が僧侶を紹介する際に重視しているのは、読経の良し悪しよりもむしろ、地域性（寺院の所在地と故人の故郷が近隣であること）や僧侶の人となり（僧侶の遺族との接し方）である。この結果は、「遺族を安心させてあげること」をA氏が葬祭社社員としてのポリシーとして掲げていることに即したものとして理解できる。



浦添ようどれ付近

11月8日(火)：4日目は、最初に沖縄県名護市にある沖縄愛楽園交流会館を訪れ、辻学芸員から解説を受けた。本施設は、沖縄におけるハンセン病患者の療養施設として戦前に建立されたものである。資料館は、辻学芸員も参加した琉球大学の聞き取り調査による資料を基に2015年に建立された。辻学芸員の解説では、現在でも施設には99の方が暮らしているが治療薬のためにハンセン病はすでに完治しており患者ではないこと、また、世界では生活水準を主な要因として年間約20万人ほどのハンセン病患者が報告されている現状を指摘された。この指摘は、ハンセン病にまつわる問題が、医学的なものではなく、むしろ社会制度によって形作られたことを確認するためのものであった。解説は、愛楽園の沿革、沖縄における戦前・戦中・米軍の占領下のハンセン病患者の扱い、日本復帰後の優生保護法やらい予防法の適用(ともに1996年廃止)、そして現在にいたる裁判と今後の展望と多岐にわたった。なかでも宗教に関連して、納骨堂の存在と遺骨の扱い、そして宗教関係者がどのように関わってきたのかについて理解を深めることができた。

次いで、沖縄独立運動や靖国裁判の原告として活動する彫刻家の金城實氏のアトリエを訪れて聞き取り調査を行った。金城氏からは、台湾と沖縄の交流、沖縄の死生観、現在取り組まれている執筆活動、そして在日朝鮮人と沖縄の関係にわたり多様な話を聞くことができた。金城氏は、ざっくばらんな口調を用いていたが、若き研究者に自らの経験や思想を伝えようとする明確な意図があったように思われる。金城氏の根幹には、自身の体験をもとに構築された思想があり、それは「人は『出会いと言葉』によって変わることができる」というものであった。また、聞き取り調査において金城氏は、おそらく普段通りの姿で、口調もあらく、自身のことを誇り高いという形容詞とともに差別的呼

称をもって呼ぶことがあった。これは、私個人の推察になるが、おそらく意図的に、これまで抑圧され差別されてきた沖縄の人々を、自身の立ち振る舞いをもって我々に体现していたのではないかとと思われる。本土から訪れた若手研究者に対して、あなた自身はこのような人を人として大事にすることができるのかを問うているように感じた。



金城實氏のアトリエ

## 海外研究調査報告 (2022.10.1~2023.3.31)

### アメリカ宗教学会・EBS100周年パネル発表参加報告

国際仏教研究 (英米班) 研究員 マイケル・コンウェイ

2021年に東方仏教徒協会は、設立100周年を迎えた。2017年に協会の運営が本学に移管された頃から、その重要な節目を記念するための事業がいくつも計画されていた。設立の100周年に当たる年に、雑誌のレイアウトを刷新し、1965年から続けられた“New Series”を“Third Series”に改めることにした。また、本学を会場に開催された2021年度の印度学仏教学会大会において、日本語による記念パネルを組織し、発表を行ったが、パンデミックの影響によって、2021年11月にテキサス州サンアントニオ市に開催されたアメリカ宗教学会において行う予定であった記念パネルについては、2022年11月に延期することになった。(2021年のアメリカ宗教学会は、ハイブリッド形式で実施されたが、今回の記念パネルは、雑誌の投稿者と縁をつなぎ、語り合うことが重大な目的であったので、日本から対面参加ができる状況になるまで待つことになった。)

アメリカ宗教学会における東方仏教徒協会設立100周年記念パネルは、国際真宗学会と共同開催のセッションにおいて2022年11月19日(土)の夕方に開催された。全体のテーマは“The Eastern Buddhist Society: Past and Future”(東方仏教徒の過去と未来)で、四名の発表者の題目は以下の通りであった。

- ① “The Suzukis’ Visions of an “Unsectarian Journal”” 日沖直子(天理大学非常勤講師・南山大学宗教研究所研究員)氏
- ② “Power Dynamics and Legitimation in the Founding of the Eastern Buddhist Society” マイケル・コンウェイ(本学准教授)
- ③ “The Future Past: The Eastern Buddhist through a Diachronic Lens” マーク・ウンノ(オレゴン大学教授)氏
- ④ “Thinking With Modern Philosophy: Possible Buddhist Approaches” ジョン・ロブレグリオ(東方仏教徒協会編集者)氏

上記の発表を行うことを通して、東方仏教徒協会が設立された時の願いを確かめ、参加者と共有した上で、今後の雑誌の編集方針について報告し、それに対する

理解を深めることによって、将来の執筆者を募ろうとした。

日沖氏の発表は、設立当初の願いを確かめるために、表紙裏の標語に掲げている言葉に注目し、“Unsectarian”という語が、鈴木大拙と鈴木ピアトリスによってどのように理解されていたかについて報告した。鈴木大拙がその語を用いる時に、当時の日本国内に推奨されていた「超宗派的仏教」を想定していたのに対して、鈴木ピアトリスが、神智学協会等で語られていた「いかなる宗教に共通する普遍的な真理」のことを想定していたということを明らかにした。氏の考察を通して、100年前に雑誌の発行を志した時の思想的環境の一端が明確となり、協会の設立者が雑誌に託していた願いがより鮮やかに把握できるようになった。

報告者のコンウェイは、更に協会が設立された時の思想的環境について考察を進め、鈴木大拙と佐々木月樵が、東方仏教徒協会を学会として組織し、*The Eastern Buddhist*誌を学術誌として刊行する理由について考察した。当時において、仏教者が仏教の思想内容について英語や他のヨーロッパの言語で発信することが少なく、19世紀末から20世紀の初頭にかけて仏教に関して英語で書かれた多くの研究書は、アジアに滞在したキリスト教の宣教師によって書かれた。その著作は、誤解と偏見に満ちており、学術的な語りの権威を持ちながらも、仏教の教え、そして仏教教団の歴史を正確に捉えているとはとうてい言えない内容になっている。そのような言説と同等の権威を獲得し、その誤解を解き、仏教者が仏教について語る媒体を得るために、鈴木と佐々木が、英文の学術誌として*The Eastern Buddhist*を発刊することにしたと論じた。

1970年代と1980年代に、東方仏教徒協会において開催されていた西谷啓治の講義を聞き、大学院生の時分で協会の活動に関わっていたマーク・ウンノ氏は、“New Series”が発刊された願いと、“New Series”が西洋の仏教研究にいかなる影響を及ぼしたかということについて報告した。氏は、その時代の雑誌の発行に携わっていた人々が、単に学術的な仏教研究を進め

ていたのではなく、真理の探究に裏付けられた仏教文化の発信をしていたから、西洋において多くの共感者を得て、広い影響を及ぼすことができた」と論じた。

現在、*The Eastern Buddhist* 誌の編集者として勤めているジョン・ロブレグリオ氏は、今後の雑誌の編集方針について発表し、聴衆に投稿を促した。表紙裏の標語に書かれているように、*The Eastern Buddhist* 誌には、仏教のあらゆる側面を公平にかつ批判的に分析する研究が掲載されてきたから、編集方針は、「オムニバス方式」になっている。そのことを伝えた上で、文献学的考察に終始しない、現代思想と現代社会の諸問題に応答する研究をも今後、積極的に刊行したいという願いを共有した。

上記の4名の発表の後、質疑応答の時間が設けられた。マーク・ブラム（カリフォルニア大学バークレー校教授）氏やジェームズ・ドビンズ（オーバリン大学名誉教授）氏よりコメントと質問がなされ、活発な議論が展開された。

アメリカ宗教学会の大会には、7,000人ほどの研究者が集い、同時に30部会以上が開催されるので、仏教関係の部会が同時に開催されることが多々ある。今回のパネル発表は、仏教と日本の宗教を主題にした部会と同時刻で開催されたため、参加者は少なく、投稿者を募るために望んでいたほどの効果がなかったかと考えられる。しかし、参加した人には、協会の設立の願いと今後のビジョンについて共有することができたので、有意義であったと思う。また、日沖氏、ウンノ氏、そしてコンウェイの発表に基づいた論文を *The Eastern Buddhist* 誌に掲載する方向で調整しているので、やがて雑誌の読者にはその内容を広く共有することができる。



会場内の様子



発表の様子



## インド調査出張報告

大谷大学所蔵仏教写本研究・研究代表者 DASH Shobha Rani

大谷大学所蔵仏教写本研究班は現在「パリ語貝葉写本の研究—保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心に—」というテーマで研究活動を行っている。本研究班は仏教に関する「総合的な写本研究」を目指すため、その学際的・国際的研究が必要とされる。その目的を達成するために、2023年2月20日～24日及び2月27日～3月2日の期間中に本研究班の研究及び今後の研究に役立つよう情報収集、研究者・研究機関とのネットワーク構築を主な目的として以下の研究活動を行った。

まずは、インド東部・オディシャ州の大谷大学の協定大学である Kalinga Institute of Industrial Technology (KIIT) 大学の Computer Science 学科の教員2名と15名の学生たちと本班貝葉写本目録のデータベース構築に関して説明会を開催した。Excelで入力されているデータを見やすい形でレイアウトを作成し、検索できるようにすることを KIIT 大学の教員や学生たちの協力を得て実施する予定である。



図1：KIIT 大学 Computer Science 学科の教員と学生たちと懇談

本研究班とドイツのハイデルベルク大学との共同研究に昨年度講演をいただいた Prof. Sineruddha Dash, Dr. Mamata Mishra がブバネシュワルに在るとの情報を得て、両研究者と出会い、短い間ではあったが懇談をすることができた。新しく作られている貝葉写本の情報を得て、「貝葉写本＝古いもの」の固定観念を考え直す必要があると教われた。

2月27日～3月2日まではインド中央政府の文化省（Ministry of Culture）のもとにある National Mission for Manuscripts（以下、NMM と略す）にお



図2：ダッシュ教授、ミシュラ博士と貝葉写本

いて研究活動を行なった。今年20周年を迎えた NMM は様々な写本の研究、教育、保存、修復など幅広い分野で写本に関する教育・研究をサポートするインド最大の国立機関である。詳細について当機関の公式ウェブサイト（[www.namami.gov.in](http://www.namami.gov.in)）を参考にされたい。



図3：NMM の入り口

2月27日に NMM と大谷大学真宗総合研究所の学術協定を締結した。調印式に NMM の所長である Dr. Anirban Dash 以外に、インド文化交流評議会（ICCR）の長官 Dr. Vinay Sahasrabudde も同席された。その他、NMM が所属する Indira Gandhi National Centre for the Arts の Member Secretary の S. N. ジョーシ氏など多くのインド政府関係の方々も出席されたことが本協定の重要性を表す。

28日に NMM を訪問し、デジタル化、保存、修復などの作業場の見学をした。

3月1日に NMM の Tattvabodha Lecture Series の一環として「Indic Manuscripts in Japan」という題



図 3 : NMM との学術協定調印式



図 4 : 貝葉写本の保存・修復@NMM

名で講演をした。本学所蔵写本と本研究班の写本に関する観点を紹介し、日本のその他のインド系写本所蔵についても紹介した。この講演は現地の多くの新聞に報道された。



図 5 : 講演会様子①

3月2日にNMM所長のダシュ博士と一緒にデリーのジャワハララル・ネール大学サンスクリット語・インド系言語学部のSudhir Kumar Arya教授を訪問し、収集されていた写本の情報及び教育における写本研究について情報を得た。

2月25日～3月2日の間にNMMの所長ア Nilバ ン・ダシュ博士と共同研究に関する今後の取り組みに



図 6 : 講演会様子②



図 7 : 写本閲覧@ネルー大学

ついて数回懇談も行った。日本に多くのインド系写本が散在しているが、それらの写本に関するまとめた目録などがみあたらないようである。そのために、共同作業としてこれらの写本に関する情報を定期的に収集していく予定である。さらに、大谷大学所蔵の写本のデジタル化にNMMが協力してくれるとのことである。そのために、NMMで取り扱っているスキャナー情報を提供していただいた。そのスキャナーは日本の国会図書館にも設置されているので、NMMから日本の取引先に連絡があり、取引先から報告者にも早々連絡があった。今後、写本が所蔵する大谷大学博物館と話し合い、作業を進めることになる。本学のインド系/仏教系写本のデジタル化に関してインド政府から助成金の補助などの前向きな話もできた。

## 大谷大学貝葉写本に係るタイ調査出張

大谷大学所蔵仏教写本研究・研究代表者 DASH Shobha Rani

2023年3月18日（土）～2023年3月27日（月）に、研究の確認作業及び今後の研究に向けた情報収集、研究者・研究機関とのネットワーク構築を主な目的とした出張を行った。

現地にて、Suchada Srisetthaworakul 嘱託研究員と合流し、Dhammchai Institute にて大谷大学所蔵の貝葉写本に係る文字確認作業を中心に活動を行った。

滞在中には、当該団体の出版デザインと写真を担当する部署のチーフとも顔合わせを行った。当部署はタイにおける貝葉写本の作成、保存などを5年間かけて行っており、貝葉写本に関して膨大な写真データを所蔵している。すでに『Preservation, Repository & In-depth Study of Palm-leaf Manuscripts』という著書もタイ語で出版済みであり、本著書を真宗総合研究所と大谷大学図書館に用にと2冊寄贈していただいた。

別日には、複数の写本の入力と比較は研究所が開発した写本の入力を行う、独自のソフトについての説明を受けることが出来、作業の様子も実際に見学することができた。

本出張により、写本の取り扱いや保存方法、研究班の今後の活動や方向性、貝葉写本に係る国際的ネットワークの確立に向けた事業など、多岐にわたる成果が得られた。



寄贈図書受け取りの様子



文字解読作業の様子



Dhammchai Institute の施設



作業閲覧

真宗総合研究所彙報 2022. 10. 1 ~ 2023. 3. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2022年11月2日(水)16:30~17:50

(博綜館5階第5会議室)

1. 研究所紀要第40号査読・校閲結果について
2. 2022年度研究組織について
3. 2023年度真宗総合研究所研究体制について
4. その他

報告事項:2021年度研究成果報告会開催報告  
2023年度一般研究エントリー

◇2023年1月11日(水)16:30~17:50

(博綜館5階第5会議室)

1. 研究所紀要第40号掲載原稿について
2. 真宗総合研究所東京分室PD研究員の採用について
3. 客員研究員について
4. 研究補助員の採用について
6. その他

◇2023年1月16日(月)~1月23日(月)17:00まで

(サイボウズによる書面会議)

1. 東方仏教徒協会規定改正について

◇2023年1月30日(月)~2月10日(金)17:00まで

(サイボウズによる書面会議)

1. 学術交流協定の締結について

◇2023年3月16日(水)13:00~14:30

(博綜館5階第5会議室)

1. 2023年度特定研究・指定研究・資料室研究計画について
2. 一般研究(予備研究)について
3. 特別研究員の委嘱について
4. 2023年度研究組織について
5. 研究補助員の採用について
6. その他

■特定研究 エラーニング

【研究会】

日時:2023年3月31日(金)14:00~15:30

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

出席者:一楽真 木越康 箕浦暁雄 本明義樹

内容:「仏教入門」の公開配信に向けた課題の検

討

【撮影】

日時:2022年10月14日(金)13:00~14:30

場所:響流館4階プレゼンテーションルーム

出席者:箕浦暁雄 本明義樹 難波教行 松下俊英  
本明由美子

内容:「仏教入門」の撮影(講義担当:箕浦暁雄)

日時:2023年1月26日(木)14:00~15:30

場所:響流館4階プレゼンテーションルーム

出席者:一楽真 箕浦暁雄 戸次顕彰 本明義樹  
本明由美子

内容:「仏教入門」の撮影(講義担当:箕浦暁雄)

日時:2023年2月21日(水)10:00~12:30

場所:響流館4階プレゼンテーションルーム

出席者:一楽真 箕浦暁雄 戸次顕彰 本明義樹  
本明由美子

内容:「仏教入門」の撮影(講義担当:一楽真)

■国際仏教研究

【出張】

◇第10回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ

2023年3月9日(木)~14日(火) カリフォルニア州バークレー市 浄土真宗センター

出張者:Michael J. Conway、アマミチヒロ、  
Woo Jongin、竹原仰

◇アメリカ宗教学会年次大会

2022年11月18日(金)~24日(木) アメリカ合衆国コロラド州デンバー

出張者:Michael J. Conway、ジョン・ロブレグリ  
オ、日沖直子、マーク・ウンノ

【会議】

◇国際シンポジウム準備会議

第2回 2022年12月8日(木)14時40分~16時10分

第3回 2023年3月29日(水)16時~17時30分

場所:真宗総合研究所内 ミーティングルーム  
(響流館4階)

参加者:井上尚実、Michael J. Conway、  
アマミチヒロ、千葉一生、Woo Jongin

## ■EBS

### ◇来年度以降の欧米班研究計画に関する会議

日 時：2023年2月3日(金)16時～17時15分  
場 所：真宗総合研究所内 ミーティングルーム  
(響流館4階)  
参加者：井上尚実、Michael J. Conway、  
アマミチヒロ、千葉一生

### ◇東方仏教徒協会運営委員会

日 時：2023年2月13日(月)13:00～14:00  
場 所：博覧館5階第5会議室  
出席者：一楽真、平野寿則、柘植至、江森英世、  
藤元雅文、山内美智、アマミチヒロ、  
新田智通、Michael J. Conway、  
Robert F. Rhodes、岡田治之、藤枝直子、  
筑田一毅

### ◇東方仏教徒協会顧問会議

日 時：2023年3月7日(火)11:00～12:00  
場 所：真宗大谷派宗務所会議室  
出席者：木越渉、酒井良、延澤栄賢、一楽真、  
江森英世、井上尚実、Robert F. Rhodes、  
山内美智、蒲池誓、岡田治之、筑田一毅、  
藤枝直子

### ◇EBS 編集会議

2022年10月17日(月)16:00～  
2022年11月25日(金)16:30～  
2023年1月16日(月)17:00～  
2023年3月17日(金)17:00～  
場 所：EBS事務局オフィス  
出席者：Robert F. Rhodes、井上尚実、  
Michael J. Conway、新田智通、  
John LoBreglio (Skype)、藤枝直子

### ◇EBS 公開セミナー

2022年10月24日(月)14:40～16:10  
2022年12月5日(月)14:40～16:10  
2022年12月26日(月)14:40～16:10  
2022年1月23日(月)14:40～16:10  
講 師：Michael J. Conway  
場 所：響流館4階会議室

### ◇EBS 公開講演会

第2回 EBS 公開講演会 (オンライン Zoom 配信)  
2022年12月6日(火)  
於 響流館3階マルチメディア演習室

講 師：Lucia Dolce (ロンドン大学東洋アフリカ  
研究学院教授)

講 題：“What Is Japanese Medieval Buddhism?:  
New Perspectives from Tantric Ritual  
Material”

出席者：井上尚実、Michael J. Conway、  
Robert F. Rhodes、千葉一生、Woo Jongi  
ほか

### 第3回 EBS 公開講演会 (オンライン Zoom 配信)

2023年2月22日(水)  
於 響流館3階マルチメディア演習室  
講 師：James C. Dobbin (オーバーリン大学名誉教  
授)

講 題：“The Many Faces of D. T. Suzuki” (鈴木  
大拙の多面性)

出席者：井上尚実、Michael J. Conway、  
Robert F. Rhodes、千葉一生、Woo Jongin  
ほか

## ■清沢満之研究

### 【ミーティング】

#### ◇第9回

日 時：2022年10月5日(水)14:40～16:10  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
内 容：研究班の活動報告及び各作業報告と検討

#### ◇第10回

日 時：2022年10月19日(水)15:00～16:30  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
内 容：研究班の活動報告及び各作業報告と検討

#### ◇第11回

日 時：2022年11月4日(金)15:00～16:30  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
内 容：研究班の活動報告及び各作業報告と検討

#### ◇第12回

日 時：2022年12月26日(月)13:00～14:30  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
内 容：研究班の活動報告及び各作業報告と検討

◇第13回

日時：2023年2月10日(金)15:00~16:30  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
会場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
内容：研究班の活動報告及び各作業報告と検討

◇第14回

日時：2023年3月2日(木)15:00~16:30  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
会場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
内容：研究班の活動報告及び各作業報告と検討

◇第15回

日時：2023年3月16日(木)15:00~16:30  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
会場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
内容：研究班の活動報告及び各作業報告と検討

【全体会議】

◇第2回

日時：2023年1月20日(金)18:00~19:30  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、福島栄寿、山雄優生、藤井了興  
会場：ミーティングルーム  
内容：清沢班作業全体の進捗状況報告  
作成リストの内容検討

◇第3回

日時：2023年3月23日(木)10:30~12:00  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、名畑直日見、福島栄寿、山雄優生、藤井了興  
会場：ミーティングルーム  
内容：清沢班年間作業報告  
作成リストの内容検討  
新規文献情報について  
西方寺との情報共有について

■大谷大学所蔵仏教写本研究

【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究プロジェクト公開研究発表会】

◇第12回

日時：2022年11月25日  
発表者：Prof Michael Radich  
(HCTS, Heidelberg University)  
会場：オンライン (Zoom)  
発表題名：Two Sets of Digital Tools for the Study of Chinese Buddhist Texts

◇第13回

日時：2022年12月9日  
発表者：Dr Bunchird Chaowarithreonglith  
(Dhammachai Tipitaka Project,  
Ayutthaya)  
会場：オンライン (Zoom)  
発表題名：When Dealing with a Hundred Pāli Manuscripts: Editing Subhasutta of the Dīghanikāya

◇第14回

日時：2023年1月13日  
発表者：Dr Manik Bajracharya & Dr Rajan Khatiwoda  
(Heidelberg Academy of Sciences and Humanities)  
会場：オンライン (Zoom)  
発表題名：Documenting and Editing Inscriptions from 2023年2月27日(月)~2023年3月2日(木) the Kathmandu Valley and Beyond

【海外出張】

◇第1回

日時：2023年2月18日~2023年3月8日  
※大学用務・個人研究等の日程を含む  
出張先：プバネシュワル、デリー (インド)  
出張者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)  
要務：現地情報収集及びインド政府の National Mission for Manuscripts との学術協定 (締結済み)

◇第2回

日時：2023年3月18日~2023年3月26日  
出張先：アユタヤ (タイ)  
出張者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)  
要務：情報収集、文字確認作業

【ミーティング・情報交換】

◇第1回

日時：2022年11月8日18:30~20:00  
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)  
新田智通 (大谷大学)  
戸次顕彰 (大谷大学)  
場所：真宗総合研究所内ミーティングルーム  
内容：総括及び今後の研究方針について

◇第2回

日 時：2022 年 12 月 18 日 11:30~13:00  
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)  
 Dr Suchada Srisetthaworakul  
 (Mahidol University, 本班嘱託研究員)  
 場 所：オンライン (Line)  
 内 容：2023 年 3 月のタイ調査の打ち合わせ、  
 情報交換

◇第3回

日 時：2022 年 12 月 21 日 13:00~14:30  
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)  
 Prof Anirban Dash (National Mission for  
 Manuscripts, インド)  
 場 所：オンライン (Zoom)  
 内 容：情報共有、学術協定締結について

◇第4回

日 時：2023 年 1 月 8 日 18:30~20:00  
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)  
 Dr Anand Mishra (ハイデルベルク大学)  
 場 所：オンライン (Zoom)  
 内 容：公開講演会に関する打ち合わせ

【講演・シンポジウム】

◇第1回

日 時：2022 年 12 月 1 日  
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)  
 場 所：オンライン (Zoom)  
 内 容：インド・Woxsen 大学主催オンライン国際  
 シンポジウムに参加・研究発表

◇第2回

日 時：2022 年 12 月 24 日・25 日  
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)  
 場 所：オンライン (Zoom)  
 内 容：インド・オンラインシンポジウム  
 'National Seminar on Manuscript Heritage  
 of India: Its Past, Present and Future' に  
 参加・研究発表

◇第3回

日 時：2023 年 3 月 1 日  
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)  
 場 所：デリー (インド)  
 内 容：インド・National Mission for Manuscripts  
 において講演

東京分室指定研究

【出張】

◇2022 年 11 月 5 日(土)~8 日(火)

出張先：沖縄 (波上宮・護国寺・泊外人墓地・普天  
 間バプテスト教会・日本キリスト教団佐敷  
 教会・真宗大谷派東本願寺沖縄別院・浄土  
 真宗本願寺派本願寺沖縄別院・国立ハンセ  
 ン病療養所愛楽園・金城実氏アトリエ)

要 務：共同研究テーマ「宗教と社会の関係をめぐ  
 る総合的研究-現代社会における宗教と共  
 生に関わる調査の実施。」

出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤  
 崎瑞央

◇2023 年 3 月 2 日(木)

出張先：大谷大学

要 務：PD 研究員の研究成果報告

出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤  
 崎瑞央

【公開シンポジウム】

◇宗教と多文化共生-「在日コリアンの宗教」の現在-

日 時：2022 年 11 月 26 日(土)

場 所：大谷大学

講演者：荻翔一、中西尋子 (関西大学非常勤講師/  
 大阪公立大学都市文化研究センター研究  
 員)、宮下良子 (東洋大学アジア文化研究  
 所客員研究員/大阪公立大学都市科学・防  
 災研究センター特別研究員)、吉田全宏  
 (大阪公立大学都市文化研究センター研究  
 員)、谷富夫 (大阪市立大学名誉教授/前  
 甲南大学文学部教授) (コメント)

出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤  
 崎瑞央

【公開研究会】

◇東京分室公開研究会

日 時：2023 年 2 月 13 日(月)

場 所：オンライン

講演者：橋迫瑞穂 (大阪公立大学大学院文学研究科  
 都市文化研究センター (UCRC) 研究員、  
 立教大学社会学部ほか兼任講師)

出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤  
 崎瑞央

【ミーティング】

◇第1回

日 時：2022年10月10日(月)  
場 所：真宗総合研究所東京分室  
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央  
内 容：公開シンポジウム事前勉強会

◇第2回

日 時：2022年10月24日(月)  
場 所：真宗総合研究所東京分室  
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央  
内 容：沖縄研修事前勉強会

◇第3回

日 時：2022年11月14日(月)  
場 所：真宗総合研究所東京分室  
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央  
内 容：公開シンポジウム事前勉強会

◇第4回

日 時：2022年11月21日(月)  
場 所：オンライン  
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央  
内 容：公開シンポジウムについて

◇第5回

日 時：2022年12月12日(月)  
場 所：真宗総合研究所東京分室  
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央  
内 容：公開シンポジウムの振り返り、公開研究会について

◇第6回

日 時：2023年1月16日(月)  
場 所：真宗総合研究所東京分室  
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央  
内 容：公開研究会事前勉強会

◇第7回

日 時：2023年3月13日(月)  
場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央

内 容：研究成果報告会振り返り、来年度に関して

個人研究 荻班

【出張】

◇2022年11月27日(日)・28日(月)

出張先：KCCJ 大阪築港教会  
駐大阪韓国文化院

要 務：日曜礼拝の参与観察・関係者への聞き取り  
研究関連資料・展示物の閲覧

出張者：荻翔一

◇2022年12月20日(火)

出張先：東海大学湘南キャンパス

要 務：東海大学准教授・李賢京氏との研究交流

出張者：荻翔一

◇2023年1月19日(木)～21日(土)

出張先：生野オモニハッキョ

高麗寺

京都佛立ミュージアム

要 務：生野オモニハッキョの見学

高麗寺の見学

京都佛立ミュージアムの見学

出張者：荻翔一

個人研究 陳班

【学会発表・研究会参加】

◇日本華僑華人学会第20回年次大会

日 時：2022年10月22日(土)～23日(日)

場 所：神奈川大学

要 務：学会参加、研究発表

参加者：陳宣聿

◇東アジア性異学会第139回定例研究会

日 時：2022年11月13日(日)

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参加者：陳宣聿

◇令和4年度国立民族学博物館共同研究会

日 時：2022年11月27日(日)

場 所：国立民族学博物館

要 務：研究会参加、研究発表

参加者：陳宣聿



◇ Anthropology of Japan in Japan (AJJ) 年会  
日 時：2022年12月2日(金)～4日(日)  
場 所：京都大学  
要 務：研究会参加  
参加者：陳宣聿

◇大谷大学「プレFD実践演習」  
日 時：2022年11月29日(火)  
場 所：大谷大学  
要 務：ゲストスピーカー  
参加者：磯部美紀

◇2022年度日中妖怪研究シンポジウム  
日 時：2022年12月3日(土)  
場 所：オンライン  
要 務：シンポジウム参加  
参加者：陳宣聿

◇國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所研究会  
2022年度第6回  
日 時：2022年11月30日(水)  
場 所：オンライン  
要 務：研究会参加  
参加者：磯部美紀

◇お茶の水女子大学ジェンダー研究所、国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」  
日 時：2022年12月20日(火)  
場 所：オンライン  
要 務：研究会参加  
参加者：陳宣聿

◇「宗教と社会」学会創立30周年記念特別企画「宗教の社会貢献」  
日 時：2022年12月16日(金)  
場 所：オンライン  
要 務：研究会参加  
参加者：磯部美紀

◇東アジア権異学会第140回定例研究会  
日 時：2023年2月19日(日)  
場 所：園田学園女子大学  
要 務：研究会参加  
参加者：陳宣聿

◇国際日本文化研究センターシンポジウム「宗教とジェンダーの最前線」  
日 時：2022年12月24日(土)  
場 所：オンライン  
要 務：研究会参加  
参加者：磯部美紀

**【出張】**

◇2023年2月2日(木)～3日(金)  
出張先：東北大学  
要 務：教員との面談、情報収集  
出張者：陳宣聿

◇大正大学宗教学会2022年度秋期大会  
日 時：2023年2月23日(木)  
場 所：大正大学巢鴨校舎  
要 務：研究会参加  
参加者：磯部美紀

**個人研究 磯部班**

**【学会発表・研究会参加】**

◇東洋大学「宗教社会学B」  
日 時：2022年11月11日(金)  
場 所：東洋大学  
要 務：ゲストスピーカー  
参加者：磯部美紀

**【出張】**

◇2022年11月30日(水)  
出張先：大谷大学  
要 務：資料収集  
出張者：磯部美紀

◇日本社会学会第95回学術大会  
日 時：2022年11月12日(土)～13日(日)  
場 所：追手門学院大学茨木総持寺キャンパス  
要 務：学会参加  
参加者：磯部美紀

◇2023年1月12日(木)  
出張先：大谷大学  
要 務：専門的知識の提供  
出張者：磯部美紀

◇2023年3月1日(水)  
出張先：大谷大学  
要 務：専門的知識の提供、資料収集

出張者：磯部美紀

**個人研究 澤崎班**

**【学会発表・研究会参加】**

◇ 2022年11月29日(火)

出張先：大谷大学「プレFD実践演習」

要 務：ゲストスピーカー

出席者：澤崎瑞央

◇ 東アジア仏教研究会 2022年度第2回大会

日 時：12月3日(土)

場 所：オンライン

要 務：参加

出席者：澤崎瑞央

◇ 「科学と仏教思想」2022年度第5回研究会

日 時：2月24日(金)

場 所：オンライン

要 務：参加

出席者：澤崎瑞央

◇ 現代と親鸞第4回公開シンポジウム「宗教者にとって「現場」とは何か？」

日 時：3月16日(木)

場 所：オンライン

要 務：参加

出席者：澤崎瑞央

**【出張】**

◇ 2022年11月30日(水)

出張先：大谷大学

要 務：資料収集

出張者：澤崎瑞央

◇ 2023年2月22日(水)

出張先：鶴見大学仏教文化研究所

要 務：専門的知識の共有

出席者：澤崎瑞央

◇ 2023年3月1日(水)～3日(金)

出張先：大谷大学

要 務：専門的知識の提供、資料収集

出張者：澤崎瑞央

## 『研究所報』「研究交流」に関するご案内

真宗総合研究所では今号より新たに研究成果の発表、研究に関する交流の場として『研究所報』に「研究交流」を設けております。「研究交流」は真宗総合研究所に所属する全ての研究員の皆様のご投稿いただけます。

研究成果公開の場として是非ご利用ください。

『研究所報』は年に2回刊行し、そのすべての号において「研究交流」の原稿を募集予定です。

次号（83号）の募集要項は以下の通りです。

・投稿申請〆切：2023年9月22日（金）17：00まで

\*以下2点をご提出ください。

『真宗総合研究所 研究所報』「研究交流」投稿申請・承諾書

『真宗総合研究所 研究所報』「研究交流」投稿における不正行為防止に関する誓約書

・原稿提出〆切：2023年10月27日（金）17：00まで

\*データにて [kenkyusyo@sec.otani.ac.jp](mailto:kenkyusyo@sec.otani.ac.jp) までご提出ください。

『真宗総合研究所 研究所報』「研究交流」投稿申請・承諾書、『真宗総合研究所 研究所報』「研究交流」投稿における不正行為防止に関する誓約書および「研究交流」のフォーマットについては、別途、真宗総合研究所事務局までお問い合わせください。

真宗総合研究所 事務局

E-mail：[kenkyusyo@sec.otani.ac.jp](mailto:kenkyusyo@sec.otani.ac.jp)

